

紀
要

成安造形大学附属近江学研究所

第
15
号
—
2
0
2
5

目次

近江のまつりの今とこれから	3
―「文化・経済フォーラム滋賀」提言研究の取り組み―	
加藤 賢治	成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長
近江の懐をめぐる 9	21
石川 亮	美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
近江学ラジオとキーワードマップの試み	33
―MUSUBU座から広がる現代の「座」と「講」―	
田口真太郎	成安造形大学講師／成安造形大学附属近江学研究所研究員
石川 亮	美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

近江のまつりの今とこれから

—「文化・経済フォーラム滋賀」提言研究の取り組み—

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤

賢治

近江のまつりの今とこれから
—「文化・経済フォーラム滋賀」提言研究の取り組み—

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

はじめに

近江（滋賀県）は、長浜曳山祭、大津祭、日野祭などの曳山行事と日吉山王祭、瀬田の船幸祭など、湖国を代表する規模の大きな祭礼行事から、農村集落の鎮守の祭り、地藏盆をはじめとする各種の盆行事、オコナイや山の神などの民間信仰に基づく行事など、各地域に伝わる伝統的な民俗行事の宝庫である。それらの行事に共通して顕著な問題として、資金や担い手の不足、古い慣習による足枷などが原因となっており、それらの継続、存続が危ぶまれ、二〇二〇年のコロナ禍以降、拍車がかかっている。

「文化・経済フォーラム滋賀^{〔註1〕}」では、その現状を把握し、未来へ向けて「提言」をすべく、二〇二五年度にアンケート調査を実施し、博物館学芸員や大学の研究者などの有識者に見解を聞いて意見交換をする「文化・経済サロン^{〔註2〕}」を二回実施。そしてアンケート調査とサロンの結果を踏まえて「文化ビジネス塾（シンポジウム）^{〔註3〕}」を開催した。その現状から、祭礼等の民俗行事の行く末を考察した。

第一章 アンケート調査の実施

アンケート調査の実施方法

まず、アンケート調査の対象とする祭りの定義については、「まつり」と表記することにし、曳山行事などの規模の大きな祭礼から、鎮守社を核に農村集落で組織された大小の宮座の祭礼、寺院で行われる浄土真宗の報恩講や、地藏盆や念仏踊りをはじめとする各種の盆行事、オコナイや山の神などの民俗行事を含むとした。

アンケートを行う地域的な範囲は、当初、都市部や農漁村などが散在する大津市などに限って行う考え方もあったが、二次元コードを利用して、Google フォームで回答を回収する方法を検討する中で、滋賀県文化財保護課の民俗担当者である矢田直樹氏に協力をお願いし、県内の市町の民俗担当者呼びかけを行い、広く県域で実施することとした。

五月から六月にかけて、アンケート内容を精査し、七月初めから八月末までを回答期間として、県内十九の市町の民俗担当者に依頼文を配布し、各市町の「まつり（祭礼行事と民俗行事）」の担当者にアンケート用紙を配布する形で実施した。

アンケート調査の内容

アンケートの項目は十八項目で、基本情報を中心としながら、祭りの問題点やこれからの向けての工夫など、祭礼、民俗行事の担当者が共有し、自らの行事の改善に役立つような内容とした。また可能な限り自由記述欄も設けて、生の声を聞けるようにした。

・項目は、以下の通り

- (一) あなたのお名前をご記入ください（アンケートの内容を公開する際に個人のお名前を公開することはありません）。
- (二) あなたの年齢を教えてください。
- (三) ご連絡先を教えてください（携帯電話の番号またはメールアドレスなど）。
- (四) あなたが所属される自治会の名称をご記入ください。また、「まつり」の催行に関連して、字名、講中、町組などの組織に所属されている場合は、その名称もご記入ください。
- (五) あなたが所属される自治会の加入率をご記入ください（概ねで構いません）。
- (六) あなたがアンケートにお答えいただく「まつり」の名称と催行される「日付」を教えてください。
※ここで言う「まつり」とは、神社の例祭やお寺の行事、その他「オコナイ」や「山の神」「地藏盆」などの伝統的な地域の行事を対象とします。
- (七) あなたと「まつり」の関係を教えてください。
- (八) その「まつり」の所在地と規模を教えてください

さい（「まつり」の起点となる神社またはお寺の名前と住所、氏子や檀家が暮らす字の名前と住所。氏子や檀家の人数（概ねの人数で構いません））。

(九) その「まつり」を催行するための参加者（スタッフ等）の人数を教えてください（ここで言う参加者とは、曳山の曳き手、神輿の担ぎ手、ボランティア、運営スタッフなど）。

(十) その「まつり」を催行するための「参加者（スタッフ等）」の人数を確保するための対策について教えてください（ここで言う「参加者」とは、曳山の曳き手、みこしの担ぎ手、ボランティア、運営スタッフなど）。

(十一) そのおまつりの内容を教えてください（神事で特筆すべき珍しい行事・神輿の数・神事以外の行事（流鏑馬、子ども神輿、稚児行列など））。

(十二) その「まつり」は、地域に伝えられてきた伝説と関わりがありますか。無い場合は無しと教えてください。伝説と関わっている場合は、どのような伝説かその概要と、伝説と関わるまつりの行事の内容も教えてください。

(十三) コロナ禍以降（最近）に、中止または省略した神事や行事がありますか（あれば具体的に書いてください）。

(十四) 「まつり」を催行するにあたっての問題点を挙げてください（該当するもの全てにチェックしてください）。

クしてください）。

(十五) 「まつり」に関する問題点があったが、克服できた取り組みがあれば教えてください。

(十六) あなたにとって「まつり」はどのような行事ですか（該当するものを一つ選んでください）。

(十七) あなたの地域の「まつり」は、今後どうなっ

(十八) 「まつり」を催行するにあたってのコミュニティ（例えば、まつりの保存会や、町内会、自治会などの地域社会や団体）について何か思うことはありますか（大切なコミュニティであると思うかどうかなど、理由も含めて回答ください）。

・以下は民俗行事の担当に配布した依頼文

令和7年（2025年）6月吉日

文化・経済フォーラム総務幹事
成安造形大学 副学長
成安造形大学附属近江学研究所 副所長
加藤 賢治

「近江のまつりの今とこれからを考える」アンケート調査のご依頼について

文化・経済フォーラム総務では、令和7年度（2025年度）の調査研究として、タイトルにあります「近江のまつりの今とこれから」を考慮するよう内容で調査研究を行います。令和8年（2026）2月の報告に於いて「調査」による、調査した内容をまとめた報告書を作成いたします。また、調査結果を踏まえて、今後の調査研究の方向性を検討いたします。調査結果を踏まえて、今後の調査研究の方向性を検討いたします。調査結果を踏まえて、今後の調査研究の方向性を検討いたします。

調査対象は、民俗行事の担当に配布した依頼文です。調査対象は、民俗行事の担当に配布した依頼文です。調査対象は、民俗行事の担当に配布した依頼文です。

調査期間は、令和7年（2025年）6月1日（月）～6月31日（日）です。調査期間は、令和7年（2025年）6月1日（月）～6月31日（日）です。調査期間は、令和7年（2025年）6月1日（月）～6月31日（日）です。

調査方法は、アンケート調査です。調査方法は、アンケート調査です。調査方法は、アンケート調査です。

調査結果は、令和7年（2025年）6月31日（日）までに報告いたします。調査結果は、令和7年（2025年）6月31日（日）までに報告いたします。調査結果は、令和7年（2025年）6月31日（日）までに報告いたします。

お問い合わせ先は、加藤 賢治 先生です。お問い合わせ先は、加藤 賢治 先生です。お問い合わせ先は、加藤 賢治 先生です。

〒520-0192 滋賀県近江郡近江町大字大津町1-1-1
TEL: 074-422-1111 FAX: 074-422-1112
E-MAIL: info@naniwa.ac.jp



アンケート調査結果

アンケート調査の結果を以下に報告する。調査結果の分析は、成安造形大学附属近江学研究所研究員の田口真太郎氏の協力を得た。

以下がその報告となる。

「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査結果報告

作成…二〇二五年九月十日 成安造形大学 田口

一・調査の目的

文化・経済フォーラム滋賀では、令和七年度の提言研究として「近江のまつりの今とこれから」をテーマに調査研究を進めている。本アンケートは、各地域の「まつり」を担う自治会や保存会の現状を把握し、持続可能な継承の仕組みを考える基礎資料とすることを目的とした。調査は令和七年七月から八月にかけて実施した。

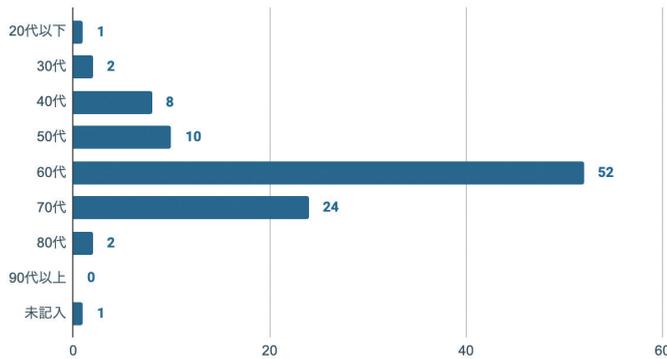
二・回答者・祭りの基本属性

回答者数

一〇三名

回答者の年代分布

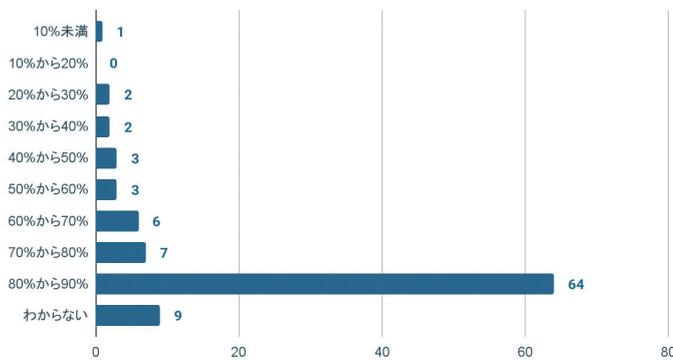
- 六十代（五十二名）、七十代（二十四名）が大半を占め、担い手世代の高齢化が顕著。
- 四十代以下は十一名にとどまった。



回答者の年代分布

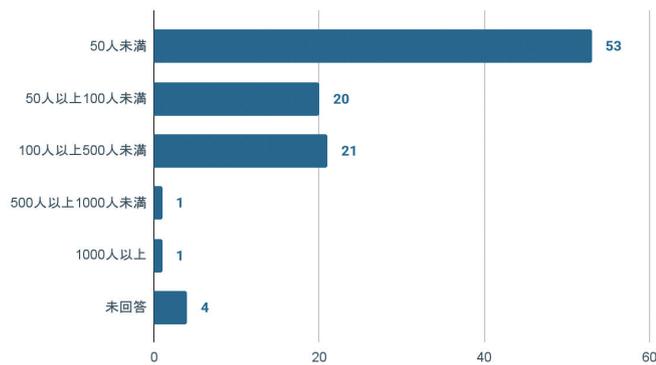
自治会加入率

- 八〇〜九〇％…六十四件と最も多い
 - 六〇〜八〇％…十三件
 - 五〇％未満…六件
 - 「わからない」…九件
- 地域によって加入率に大きな差があり、住民意識のばらつきが浮き彫りとなった。



自治会加入率

祭りの規模



祭りの規模

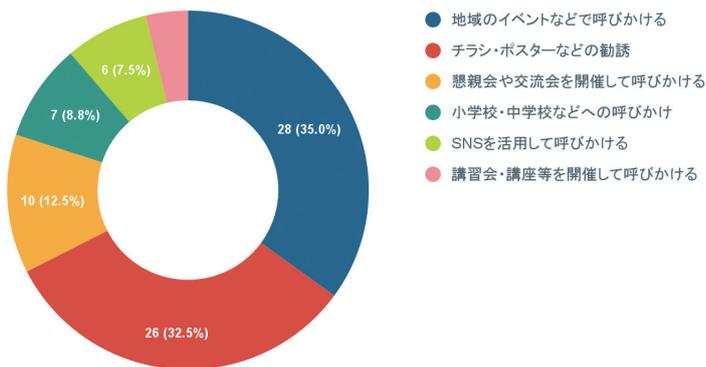
- 五十人未満…五十三件
 - 五十～一〇〇人未満…二十件
 - 一〇〇～五〇〇人未満…二十一件
 - 五〇〇人以上…二件
- 多くは小～中規模の祭りであることが分かった。

三：運営体制と課題の見える化

参加者確保の方法

- 地域イベントでの呼びかけ…二十八件
- チラシ・ポスター…二十六件
- 懇親会・交流会…十件
- 学校への呼びかけ…七件
- SNS…六件
- 講習会…三件

従来型の呼びかけが中心で、若年層や新住民を取り込む新しい工夫はまだ限定的である。

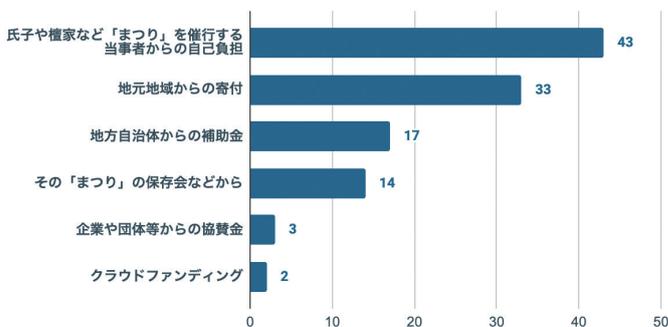


参加者確保の方法

資金調達の方法（複数選択可）

- 自己負担（氏子・檀家）…四十三件
- 地域寄付…三十三件
- 自治体補助金…十七件
- 保存会…十四件
- 企業協賛…三件
- クラウドファンディング…二件

資金面では自己負担と寄付への依存が強く、外部資金の活用は限定的である。

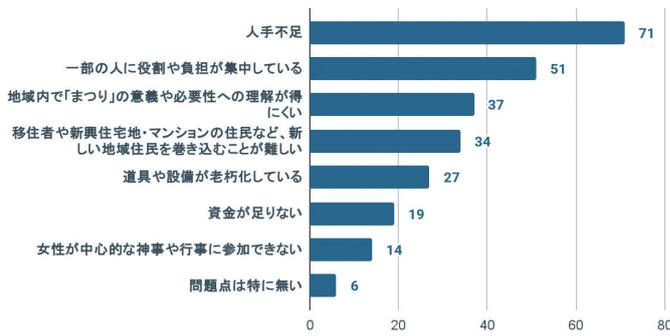


資金調達の方法（複数選択可）

課題の頻出ランキング（複数選択可）

- 一： 人手不足（七十一件）
- 二： 役割・負担の集中（五十一件）
- 三： まつりの意義への理解不足（三十七件）
- 四： 新住民の巻き込み困難（三十四件）
- 五： 道具・設備の老朽化（二十七件）
- 六： 資金不足（十九件）
- 七： 女性の参画制限（十四件）
- 八： 問題なし（六件）

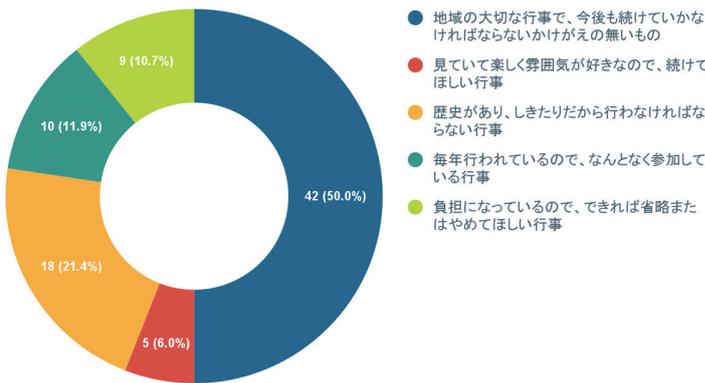
新住民の巻き込みが大きな課題として現れた。
人手不足と負担集中が突出し、次いで理解不足や



課題の頻出ランキング（複数選択可）

祭りの価値観と未来像

- 地域の大切な行事で今後も続けるべき…四十二件
 - 歴史・しきたりだから続ける…十八件
 - なんとなく参加…十件
 - 雰囲気が好きで続けてほしい…五件
 - 負担なので省略・やめたい…九件
- 半数近くが「かけがえのない行事」と位置づける一方、「しきたり」「なんとなく」「負担感」など多様な意識が併存している。

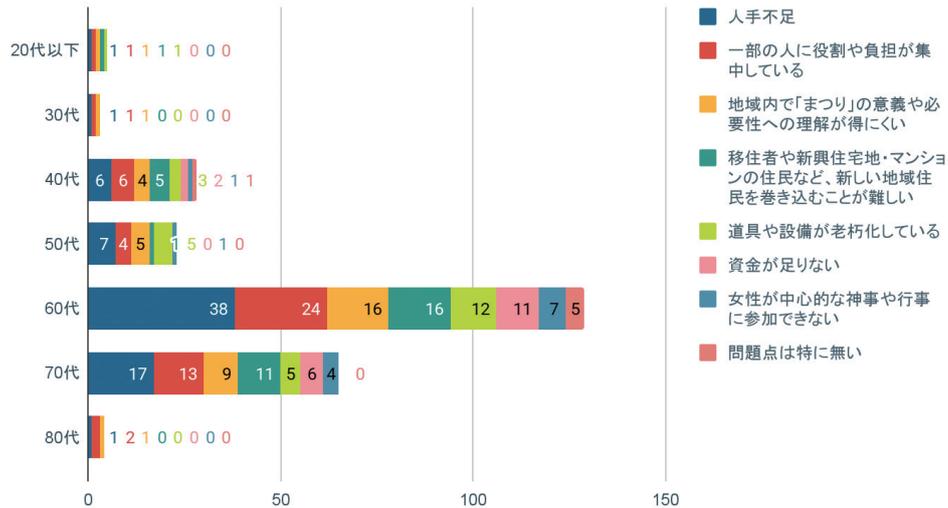


祭りの価値観と未来像

クロス分析の結果

A. 年代×課題

- 六十代（回答者の過半数）
 - 人手不足（三十八件）、負担集中（二十四件）、理解不足・新住民巻き込み（各十六件）が多い。
 - 「資金不足」（十一件）や「女性参画制限」（七件）も他世代より多く顕在化。
- 七十代
 - 人手不足（十七件）、負担集中（十三件）、新住民巻き込み困難（十一件）が目立つ。
- 四十代・五十代
 - 四十代…人手不足（六件）、負担集中（六件）に加え、新住民巻き込み困難（五件）。
 - 五十代…人手不足（七件）とまつりの意義や必要性（五件）、道具老朽化（五件）が同程度に課題。
- 若年層（二十～三十代）
 - 回答数が少ないが、ほぼ全ての主要課題を一件ずつ挙げており、担い手不足や理解不足を認識。
- 八十代以上
 - 回答は少ないが、人手不足（二件）、負担集中（二件）が指摘されている。



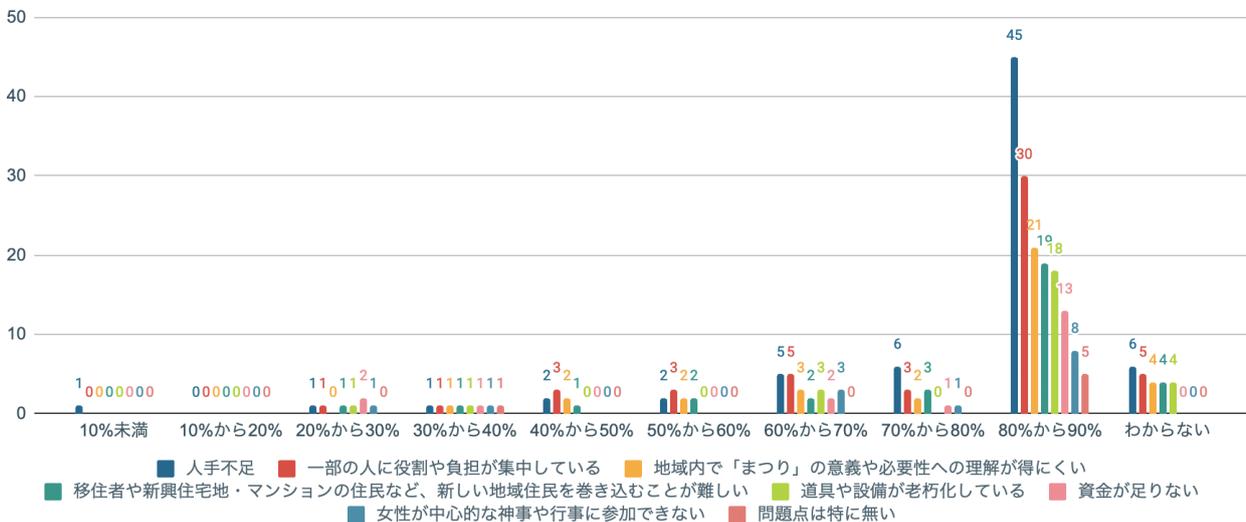
クロス分析の結果 (A. 年代×課題)

B. 自治会加入率×課題

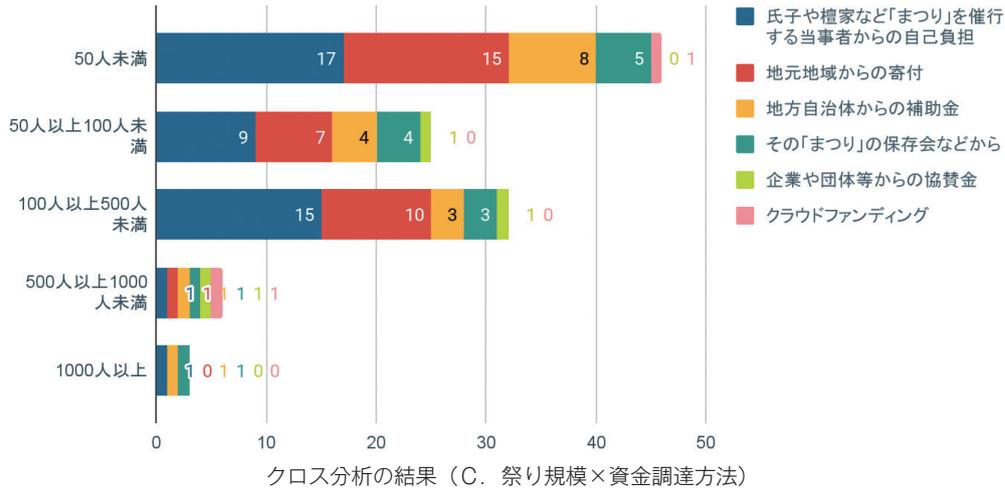
- 加入率八〇〜九〇% (最多層)
 - 人手不足 (四十五件)、負担集中 (三十件)、理解不足 (二十一件)、新住民巻き込み困難 (十九件) が突出。
- 加入率六〇〜七〇%台
 - 人手不足 (五〜六件)、負担集中 (三〜五件) など、課題認識が幅広く分布。
- 低加入率地域 (〜四〇%)
 - 件数は少ないが、「資金不足」「女性参画制限」など多様な課題が散発的に出ている。
- 「わからない」回答 (九%)
 - その中でも人手不足 (六件)、負担集中 (五件) が挙がっており、実態把握が不十分な地域でも共通課題がある。

C. 祭り規模×資金調達方法

- 五十人未満 (小規模祭り)
 - 自己負担 (十七件)、寄付 (十五件) が中心。補助金 (八件) もあるが外部協力は少ない。
 - 五十〜五〇〇人未満 (中規模祭り)
 - 自己負担 (九〜十五件)、寄付 (七〜十件) が主要財源。補助金・保存会資金も少し利用。
 - 五〇〇人以上 (大規模祭り)
 - 自己負担に加え、補助金・保存会資金・協賛金・クラウドファンディングなど多様な調達源を活用している。
- まとめ・規模が大きいほど資金調達の多様化が



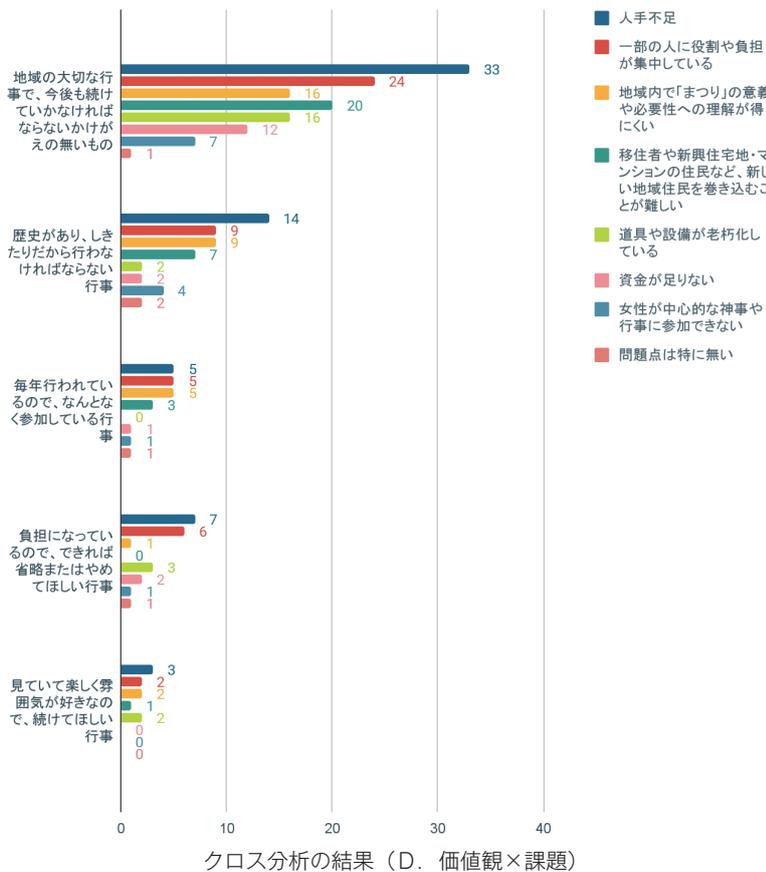
クロス分析の結果 (B. 自治会加入率×課題)



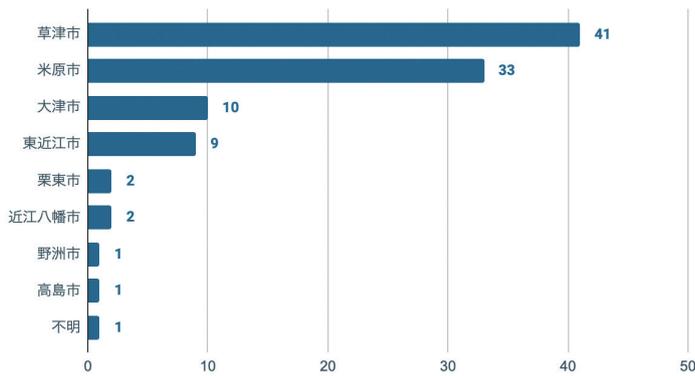
見られ、小規模は依然として「自己負担+寄付」への依存が強い。

D. 価値観×課題

- 「かけがえない行事」派 (四十二件)
 - 人手不足 (三十三件)、負担集中 (二十四件)、新住民巻き込み困難 (二十件) が突出。
 - 大切だと思う層でも深刻な課題を強く認識している。
- 「歴史・しきたり」派 (十八件)
 - 人手不足 (十四件)、負担集中 (九件)、理解不足 (九件) が中心。
 - 「なんとなく参加」派 (十件)
- 「少数ながら人手不足・負担集中 (各五件) と理解不足 (五件) を認識。
- 「負担なのでやめたい」派 (九件)
 - 人手不足 (七件)、負担集中 (六件)、道具老朽化 (三件) が明確。
- 「実際に「負担感」が強く結びついている。
- 「雰囲気が好き」派 (五件)
 - 人手不足 (三件)、負担集中 (二件) と、課題認識はやや少なめ。



E. 市町村別集計
回答件数

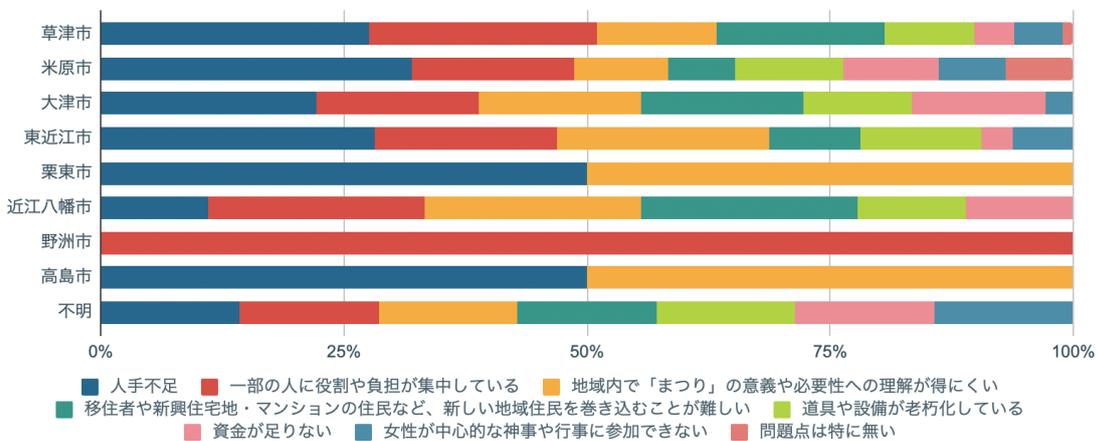


クロス分析の結果 (E. 市町村別集計 回答件数)

- 回答が多いのは草津市(四十一件)と米原市(三十三件)。両市で全体の約三／四を占めるため、この二市の傾向が全体像に強く影響している。
- 大津市(十件)、東近江市(九件)も一定数の回答があり、特徴が見える。
- その他の市町(栗東市、近江八幡市、野洲市、高島市)はサンプル数が少ないため、参考値として扱う必要がある。

市町村ごとの課題の特徴

- 草津市と米原市が主なサンプルであり、課題の傾向が鮮明に表れている。草津市は駅周辺の都市的地域では「新住民の巻き込み」「意義理解不足」が目立つ一方で、農村部も広く抱えており「人手不足」「老朽化」といった課題は米原市と大きく変わらない。多様な地域性が混在することが特徴である。
- 米原市は農村型の特徴が強く、「老朽化」「資金不足」が比較的多く見られる。ただし「問題なし」と答えるケースも一定数あり、地域ごとの差が比較的是っきりしている。
- 大津市・東近江市は複合的な課題を抱える(人手不足+負担集中+理解不足)。
- 米原市は「問題なし」も一定数あり、全体の多様性が比較的高い。
- サンプルが少ない地域は参考値としつつ、典型的な課題(人手不足、理解不足)は共通している。



クロス分析の結果 (E. 市町村別集計 市町村ごとの課題の特徴)

まとめ（クロス集計の総括）

● **人手不足と負担集中は全ての切り口で共通する最大の課題**

年代・加入率・規模・価値観・市町村いずれでも、人手不足が最も多く指摘され、その結果として一部に負担が集中する構造が浮き彫りとなった。

● **年代構成の偏りが課題の深刻さを増幅**

回答者の大半を占める六十〜七十代が強い危機感を抱いており、次世代の担い手不在が明確になっている。若年層の回答は少数だが、参加への距離感や負担感を敏感に指摘している。

● **回答者の年代偏りは「役割の担い手構造」を反映**

回答者の大半を占める六十〜七十代は、単に文化への関心が高いからではなく、自治会長や祭りの実務担当を担う役割が高齢者に集中している現状を示している。現役世代は多忙ゆえに役割を避け、結果として引退後の高齢者が担い手となる構造が全域で共通している。

● **祭り規模と資金基盤には明確な差がある**

小規模祭りは自己負担と寄付に強く依存し、持続性に限界がある。規模が大きい祭りでは補助金や協賛金など外部資源を取り込み、多様な資金調達を実現している。

● **価値観や地域性によって課題の表れ方が異なる**

「大切な行事」と考える層でも深刻な課題を認識しており、愛着と負担感が共存している。

市町村別では、草津市に見られる都市型の課題（新住民巻き込み、理解不足）と、米原市に見られる農村型の課題（老朽化、資金不足）が対照的で、地域性を踏まえた対応の必要性が示された。

自由記述

自由記載については、Google フォームに直接回答者が記入しているので、誤字・脱字等と思われるものはあえてそのまま掲載している。

（十八）あなたの地域の「まつり」は、今後どうなっ
てほしいと思いますか。

改革しながら地域の中核になる行事となつてほしい。

拡大もせず縮小もせず現状維持。伝統文化として革新を進める世の中と共存できるものであってほしい。

サンヤレ踊り保存会に自治会会全員が入ればベストと思います。

継続。

続けていきたい。

担い手不足の時は神輿の巡行にこだわらず、町内会向けのイベントなどを考えるべき。

若い人達にも参加していただきたい。高齢化が問題。

歴史や伝統を受け継ぎながらも、地域住民の交流の機会として継承してほしい。

今とこれからの時代にとって意義があるなら続けてほしい。

伝統は継承しつつも個人に負担がかからないようにし、気軽に参加できる楽しい行事になってほしい。

新興住宅、マンションの方も気兼ねなく参加出来るといい。

継続してほしい。

継続。

地域の歴史・文化の一つとして、大切に次世代へ継承されてほしい。

続けてほしい。

地域の絆を深める機会で、安心安全に暮らせる住みよい街づくりには欠かせないものとして、大切に続けてほしい。

高齢者が増えているので、町内として集う場を提供して行きたい。

参加が増え賑わいあるものになるといい。

継続して欲しい。

自治会というよりも街として開催するのがよいと感じる。

わからない。

実家の親世代がおこないがあり大変そうだったからあまり良い印象はない。

地域住民が楽しみにする行事になってほしい。

今後も続けられると良い。

継続してほしい。

継続して欲しい。

若い人が、参加出来やすい、方法に変えてでも、残して欲しい。

神輿の担ぎ手が少なく人数を集めるのに苦労しています。

氏子だけでなく、住民全体としての祭り。

発展。

継続していく中で簡素化できるところは簡素化する。

続いてほしい。

多くの方々の参加を願う。

続けていきたい。

子孫まで継続して欲しい。

継続してほしい。

伝統文化を継承していくために、幅広く参加者の募集が出来る仕組みを構築する（祭り保存会など）。

継続して欲しいが簡素化が必要。

未永く続けていきたい。

近隣の若い方々の参加。

氏子区域の新興住宅地も巻き込んで、なんとか続けていきたい。

子供やたちにとってもワクワクする祭。

今後更に充実していかなければならない。

継続して頂きたい。

日本の文化 未来永劫。

子供のためにあれば良いが、高齢者の意見が前面にでるところがあり、両者の思いが解離している。子供の思いが反映されてほしい。

地域の連帯感を生むものであり、多くの方に参加いただきたい。

コロナ以前のような祭事が行えれば良い。ただどんな形であれ、継続出来る方法を氏子総代等か中心になって考えていけば良い。

もし可能なら、残せる祭りに復活したい：失くしてはいけない祭り。

継続。

伝統行事であり、今のかたちで継承してほしい。

昔と同じ事は出来ないことを理解して、地域が取り組める規模で存続できれば良い。

老若男女問わず、誰もが参加できる全員参加型の行事になってほしい。

六十年に一度の奇祭です。忘れてしまうので保存会を作り古き良き祭りを伝承すべく秋祭りとお節分祭で奉納しています。何とか続けるべく会員が奇数月に二時間練習をしています。皆さんがワイワイ・ガヤガヤと楽しんでいます。楽しむ事が祭りの良いところだと思います。

継続はして行つてほしいが 現状は難しい。

継続、より楽しく。

現状を維持して行きたい。

時代に即したやり方で行う。

今までどおりで、継続していつてほしいと思う。

縮小。

小規模にして継続して欲しい。

若い人も理解し継続して欲しい。

なんとか続けたい。

継続して続けたい。

(十九)「まつり」を催行するにあたってのコミュニティ

テイ(例えば、まつりの保存会や、町内会、自治会などの地域社会や団体)について何か思うことはありますか(大切なコミュニケーションであると思うかどうかなど、理由も含めて回答ください)。

神社の氏子としての意識も含めて、自治会、保存会 氏子組織が協力できる体制がほしい。

地下全体で祭が必要なものと言う認識がある。

サンヤレ踊り保存会は単独で存在していますが、自治会と連携すべきか迷うところです。単独は自由に行動できるが、自治会内では動きにくい。当面は単独が良いかな。

大事な藤樹先生の顕彰への地域の希薄化↓財団法人藤樹書院の事業になっている。

理解を得るのが難しい。

宗教も絡むので、なかなか積極的には言えないが、地域の行事として興味を持ってもらいたい。

古くからの住民と新規に転入された住民が、地域の歴史や文化に触れる行事を大切にしてほしい。

町内会の存在意義、町内会長の負荷軽減が深刻化しているので形を変えていかないと将来は無い。

高齢化が進み参加者が集まらない。

自治会メンバーは祭りに参加するには、上位団体に加盟しなければならず、人も出さなければならぬので、加盟はやめておこう、の意見が主である。現在も自治会で関わっている祭事と関わっていない祭事がある。宗教的な業者の為、関わる事に反対の意見も有る。

守る所は守り、変える所は時代に合わせて見直す
勇気が大切。

町の繋がり。

世代の継続。地域から子供会が無くなり、子供世代や若い親世代を地域活動に巻き込む機会が逸している現状に危機感を強く感じていたところにコロナで拍車がかかる。改めて、行政も交え、マンションなどの既存の町内会に属さない世代も含めた仕掛けづくりの見直しが必要と考える。

町内会員の情報源収集とコミュニケーションの場であって欲しい。

今年初めて神輿委員会があると知った。学区内に住んでいるが存在を知らずにいたので、同じように知らない人も多いのでは？決まった人だけが関わることになっているのかもしれないので、広くつたえられるようになるのではないかと感じる。

地元の神社なので、町内会長として年間十位の催事に参加して負担が大きい。

町内会などで実施は役員の負担があると思うのでボランティア団体みたいなのが市であるとよいのではないかと思う。

住民同士で触れ合う機会が少なくなっているの
出来れば続けて行けたら良いと思う。

しきたりにとらわれないにか新しいまつりなら
興味はある。

特にありません。

自治会、町内会のボランティア協力という名のもとに行政アウトソーシングの下請け先となり、最低賃金から逸脱した異常な安価で行政に都合良く利用されている制度上の欠陥を改善した方が良い。改善できない場合、全国各地で各地域の「まつり」を担う膨大な数の自治会、町内会活動は順次縮小し終焉を迎えるように見受けられる。意図しているのか意図していないのか判らないが、地域の日本文化を衰退させたい行政の意向が見えている。

地域活性化のキーワードは、治田神社の例祭と夏祭りだと思っているので、今後の問題点、大人用神輿の軽量化(含む新調)。

若い世代に関心を持ってほしい。

若い人の参加が欲しい。

自治会が神輿を担当しているので大変です。

大切絆。

高齢化、共働きと参加が難しくなってきた。

自治会離れが不安。

町内に住んでいる以上は、まつりを通じてその場所の歴史と触れ合ってほしい。

継続してほしい。

必要だと思う。

まつり保存会は是非立ち上げていく。

改革が難しい。

町内の枠を越えてのコミュニティを確認いただける機会。

地域の各種の互助に役立っている。

祭を省略しようという方々が一定数おられるが、熱心に支えてくださる方もおられ、頼もしく思う。

地域コミュニティ活性化のツールとして利用してほしい。

保存会の立ち上げの必要性。

日本を正しく知る。愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。

様々な世代が集まってひとつになればよいが、今はそれがベストとも言えない。こうでなければという人が一定数おり、なかなか運営も難しい。

地域の協力体制、共助意識の高揚の為にも大切
です。

昔から、自治会や氏子総代等が中心となり、継続するための方法を模索している。神職とも意思疎通を図りながら、区民の意見反映もして継続することが大切だと思っている。

子供たちが少なく成り、帯掛け祭りやケンケト祭りを見た事が無い子供がほとんどです！他に類を見ない祭りなので復活させたい！そう思う人と、力が欲しいです。

最近では、地域のコミュニティが薄れていると思われる。せめて伝統行事であるまつりを通じてつながりを持ってもらえたらよいのではないかと。

仕事为主体であり、ほぼ関係役員と一部の団体で事業計画を消化している感じです。私もそうですが、今後さらにまつりの意義等薄れていく様に感じています。

特定の人しか参加出来ないのが現状なので、出店なども設け、盛り上がりのある、人の集まるような催事にしていきたい。

冊子を作り、コミセンの広報にも会員募集したり学校など参加を願っていきますが、なかなか。積極性が乏しい。

新興団地の祭りに対する理解が希薄である。

大人による角力踊り保存会が位置づけられているが、新しく保存会に入る人の確保が問題と聞いている。歴史ある祭りの継続について考えさせられることである。

みんなが集まれる場として必要。

高齢化が進み今後どのようなようになっていくのか心配。

地域住民が集まれる場がコロナ禍以降かなり少なくなってしまった。このようなまつりは続けて欲しい。

大切。

地域住民が集う大切なコミュニティの場である。ふれあいの場が今日は少なくなり希薄なムードがある様子が伺われる。

近隣互助の観点からも、むすびつきが必要。

一体は無理。

高齢化になり先が不安。

人口減少によりコミュニティを維持することが困難。

無理して続ける必要はない。

地域の交流、団結力に貢献。

世代間交流を図り、広く発信してゆくべき。

自治会内のコミュニティの場としては必要だが、自治会が機能しないと継続できない。

(二十) その他、「まつり」に関して思うところがあればご記入ください

まつりの意義や歴史 課題などがまとめられ、神社との関係が検討される必要があると思う。

合理的に割り切れないものは何か別のもののせいにしてきた日本人。神の崇りだと祭礼を行ってきた経緯があるが、科学が発展してきたことの表裏で神に対しての信仰心は減ってきている。

古来まつりには地域安全や豊作祈願など安定した暮らしを願う人々の祈りが込められており地域の活力の源として大きな役割を果たしていました。サンヤレ踊りの復活も旧来住民と新しく移り住んだ住民との交流も含め地域の活力の源になることを目指していました。コロナでまつりが休止した後の再開もスムーズに進みましたが自治会子ども会の子供神輿が再開せずにはいきました。サンヤレ踊り保存会は自治会、子ども会と協力し子供神輿再開に一役を果たしました。サンヤレ踊り保存会会員の多くは四十歳代で、一般的にあまり地域活動に関わっていない年齢ですが子供神輿の再開に関わったことは今後の地域活動の活性化につながると思います。

儒式祭典は、一般でいう「祭りではないのですが、祭典ということ、なんとなく回答しました。

県や市ももっとサンヤレ踊りだけではなく、地域の小さな伝統的な祭りのPRを行ってほしい。

非科学的なことは置いておいて、なぜ引き継いでいくことが必要で、地域社会にどうメリットや影響があるのか知りたい。

是非、続いて欲しいものです。神社の神輿はかき手が減りつつあるだろうから、新興住宅の間は是非活用すべき。実家のほうの兵主祭りも人がおらず、かき番の地区が五年周期で回ったが、地区合同で人確保にしたり変更で対応したと聞く。柔軟対応しないと、廃れて消えるしかない。参加はしないが観るのは見たい、という人が増えているように思う。

町内会費で神社の祭礼費用を出費することが違法かどうか。まつりは宗教行事か。

人が往来する地域力の向上には、祭はじめ、人が集まる企画が大切。

まつりや古い町並みは、止めたり壊したらそれまで。地域の大切な歴史文化として、宝として、次世代へ繋げて行きたいものです。

以上、二件目の回答入力ですが、宜しくお願い致します。草津学区二十五町内会で一番高齢化率が高い町内会ですが、少しずつ二世帯、三世帯住宅が増えてきました。小学生以下0人の最悪状態を脱し、現在は小中学生が三人、来年は小一生が二人増える予定です。この一年で新生児も二人誕生しました。

現在、町内の住民は戦前戦中と戦後世代が丁度半分ずつで、高齢化による世代交代が更に進むと思われれます。

昔、わたしが子ども時代に参加した子ども神輿は楽しい思い出になっている。今の子ども達にもより多く参加できるものになるといいなあと感じます。

若者への情宣を最検討すべき。

いろんな世代が記憶の中の思い出として残るような質であればやるといいと思う。各自治体参加者数など反映されて範囲を増やすなど変われば良いと思う。

子供が少なくなると、祭りを続けて行くという気持ちもだんだんと萎えて来る。

おこない：神社の行事：田舎の親が多額の寄付をし、代々行っているのを子どもながらに見てきました。今の時代にそぐわないと思う反面、なにもなくなるのは寂しいけれども、これも時代なのかとも思います。

治田神社ではいまでは数少ない「山の神」の神事で「蛇廻い」をいまでも継承しています（毎年一月第二日曜）。

地域が纏まるきっかけになる祭りであってほしい。特に今の時代だから尚更必要だと思う。地域コミュニティ作りの大切な入り口である。行政が祭り運営にサポートが必要である。

申し訳ありませんが当自治体は六世帯でありそう言う活動は行っていません。

継続してほしい。

文化として残して行きたい。

まつりの起源は古からその地域の人が伝えてきたが、住人は入れ替わり伝統文化に触れる機会も少なくなってきた。誰でも参加し易いまつりの催行、見て楽しい形にしていければ伝統文化の継承につながると思う。

自治会組織の崩壊が近隣自治会にておきており、祭りに関わっている自治会の高齢化。

仰木の祭はなんとか続けてこられたが、近隣集落の祭はコロナを機に辞めてしまったところも多く残念に思う。

自然の恵みに感謝する、その場所が神社であって、その感謝を表現することこそが「まつりごと」を行うという古来から伝わる日本固有の文化。まつりは、自国の歴史を正しく学ぶことに他ならない。

今はニュースをみても大変さを感じてしまう。

けど、しんどい。事務手続き等が。

子供に取って、お正月と祭りは一番の楽しみでした。

祭だけに限らず個人、個人が余裕がなく日々忙しいため、わずらわしく感じ、後まわしになっている！

どの町を見てもコロナで中止となり、元に戻そうとするように見受けられる。地域の氏神は神輿に乗り住民みんなに元氣か、頑張れよ、氣をつけてね、とお声をかけていただいていると思う。

やはり自治会の最大行事でもあり派手にする必要は無いが、現状を維持して行きたいと思えます。

ふれあいの機会。

地域の行事が少なくなっているので、小規模でも継続していければいいと思う。

時代が変わっても時代にあった方法で続けて欲しい。

年中行事だが人手不足が課題。

少子高齢化でこの地域もまつりが少なくなってしまうと思いますが、地域住民が集まれ場として長く続けられ事を望みます。

資金があれば、神輿等製作し、盛大にしたい。

割り切りも必要。

むかしは各家庭で提灯を出して、ご馳走していただくに思いますが、もう昔の話になってしまった。時代に合わせたものに変えて行くべき。

転入者参加に、理解頂けない。

保存会会長の立場として、みんなが参加しようというものにしていきたい。

第二章 二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言

二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言の原案

二〇二五年七月～八月に実施したアンケート調査と、二度開催した「文化・経済サロン」、そして「文化ビジネス塾（シンポジウム）」を実施し、それらをもとにして、二〇二五年の提言を作成した。

・以下が提言の原案である

令和八年（二〇二六年）

文化・経済フォーラム滋賀「提言」

近江のまつりの今とこれから

「共創の場」の再定義 地域文化としてのまつりの継承に向けて

はじめに 混迷する現代社会における「地域の

文化」の価値

現代の日本社会は、急速な近代化、グローバル経済中心主義を経て、今やAI技術の飛躍的発展という波の中に揉まれている。その代償として環境破壊、人間の欠落、さらには地域コミュニティの崩壊という深刻な課題に直面している。私たちは、かつてないほど豊かで便利な生活を手に入れた一方で、自らが生活する大切な「場所」の感覚や、他者との深い絆といった

幸せの基盤を見失いつつあるのではないだろうか。

こうした閉塞感を打破する鍵は、実は私たちが暮らす「地域社会」にある。かつて、柳田國男、南方熊楠、折口信夫ら先駆的な民俗学者が、明治期の急速な西洋化に警鐘を鳴らし、日本人が本来持っていた心や風習の再認識を訴えた精神を、今こそ再評価するべきではなからうか。

今回の提言では、文化・経済フォーラム滋賀としての視点に立ち、地域コミュニティの核である「まつり（祭礼や民俗行事）」が直面している現状を分析し、持続可能な滋賀の地域社会の未来に向けた提言を行いたい。

(二) 日本の「まつり」が果たす精神的・社会的機能

古来、日本の「まつり」とは単なる地域のイベントや観光行事ではない。それは、日本人の精神構造、自然観、そして共同体の維持システムが凝縮された「聖なる秩序を共有する装置」である。

民俗学的知見によれば、まつりは「日常」と「非日常」を切り替える重要なリズムである。柳田國男が説いたように、絶え間ない労働によって生命力が枯渇した状態（ケガレ^{ケガレ}）が枯れる（直会）し、エネルギーを充填することで回復させる。これは個人の精神的な再生であると

同時に、地域社会（コミュニティ）の持続を担保する不可欠なプロセスであった。

また、折口信夫はまつりの核心を、外部から訪れる聖なる存在「マレビト」との交流や、魂を活性化させる「たまふり」にあるとした。さらに構造主義的視点に立てば、まつりは「自然と人間」「聖と俗」といった対立する概念を、神輿の巡行などを通して一時的に混じり合わせ、混沌の中から日常の「秩序」を再確認させる機能を持つ。

社会的な側面では、マルセル・モースの「贈与論」に通じる互酬性・相互扶助の確認の場でもある。まつりにおける寄付や奉仕は、目に見えない絆を醸成し、精神的身体的健康や他者との関係性など、地域のレジリエンスを支える基盤となってきたのである。

(二) 滋賀県における「まつり」の現状—アンケート調査が示す危機と希望—

しかし、こうした深遠な意義を持つ近江のまつりが、いま重大な岐路に立たされている。令和七年度に実施（七月・八月）された「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査（回答数一〇三件）の結果は、現場の疲弊を克明に示している。

まず、まつりを支える中心層は六十歳代が半数を占めており、次世代への継承が急務であることが裏付けられた。自治会加入率の低下も顕

著であり、特に大津市などの都市部や新興住宅地では五〇〜六〇%に留まっている。特筆すべきは、まつり催行の問題点として、資金不足（十九件）よりも圧倒的に「人手不足（七十一件）」が挙げられている点である。また、「一部の人が役割や負担が集中している（五十一件）」という現状があり、特定個人の過度な献身に依存した体制の限界が露呈している。

さらに、コロナ禍は地域の伝統に深い爪痕を残した。一度中止や簡略化を余儀なくされた神事や芸能は、再開が困難になるケースが多い。例えば、地蔵盆をはじめとする各地の民俗行事は、二〇二五年現在、多くの地域で自治会役員のための法要へと縮小され、住民交流の場としての機能が消失しつつある。一度「まつり」を省略する方向に舵を切れば、伝承されてきた技術や「畏敬の念」は急速に失われていくのである。

一方で、回答者の五〇%が「地域の大切な行事で、今後も続けていかなければならないかえがえのないもの」と回答しており、困難な状況下にあっても、まつりを地域の誇りとして残したいという強い意志が共有されていることも事実である。

(三) 持続可能な継承に向けた「まつりの再定義（アップデート）」

まつりの存続危機を乗り越えるためには、単なる「形式の保存」から脱却し、現代の生活感

覚に合わせた「まつりの意義の再定義」が必要である。

①担い手構造を「血縁・地縁」から「系縁^{けいえん}」へ
転換

伝統的な「氏子」という閉鎖的な枠組みを超え、外部からの「関係人口」として、ボランティア（外国人を含む）、高校の生徒、大学生、専門学校生、海外からの留学生などを積極的に取り込む仕組み作りが不可欠である。実際に、一部の地域ではクラウドファンディングによる外部からの資金調達や、他地域の自治会との協力によって担ぎ手を確保するなど、新しい共助の形が芽生えている。

②「保存」に固執せず「変容」を許容する

戦後に活躍した民俗学者宮本常一が説いたように、民俗文化は生活の変化とともに変わっていくのが自然な姿である。神輿の担ぎ手が足りなければ台車を使用する、露店にキッチンカーを導入する、女性や移住者の役割を積極的に拡大するなどしながらも、最も大切な行事を残すために、時代にあった「生きている文化」としてルールを組み替える勇気が求められる。

③行政や観光客主導の「イベント」ではなく、住民の「当事者意識」を持つ

コロナ禍での中断は、これまで続けてきた伝

統的な風習を振り返る機会となり、結果として、形式的な儀礼のみを残すことになった。最も大切な、みんなで楽しむ行事が、人々の接触の機会を無くすという目的のもとに、中止となってしまった。中には、形だけの中途半端な行事として、コロナ禍を理由にやめてしまうというケースもあつたかもしれない。まつりは楽しく盛り上がるものでなくてはならない。まつりに関わる個々が主体性を持ち、何よりも当事者が「楽しむ」ことができる環境をデザインすることが、持続可能性の根源となる。

④「畏敬の念」の再考、まつりの本質を共有する

日本のまつりの本質は、自然の恵みや、人間の力ではどうにもできない運命的な存在に対する「感謝」と「敬意」にある。効率や合理性のみを追求し、すべてを科学で説明できると思いあがる現代社会において、この「畏敬の念」こそが、私たちの傲慢さを戒め、他者や自然と共に謙虚に生きるための指針となる。

戦後、私たちが物質的な豊かさを追い求める過程で置き去りにしてきた「日本の心」を、まつりという体験を通じて次世代と共に体感すること。大人たちが真剣に祈り、熱狂し、共に汗を流す姿を子供たちに見せること。それこそが、単なる行事の継承を超えた、最も価値ある「地域文化の伝承」である。「畏敬の念」を抱き、地域の暮らしを慈しむ。このシンブルで、最も

大切な心のあり方を、近江のまつりを通じて次の世代へと繋いでいくことが求められる。

まとめ 継承のために最も大切なこと―「共創の場」をつくる

文化と経済は決して対立するものではない。地域の文化的な豊かさが住民の誇りを育み、その誇りが地域の魅力を高め、新たな経済の活力（人流や共創）を生み出す。

私たちは、近江の地に受け継がれてきた「まつり」を、過去の貴重な地域文化遺産として守り、繋ぐだけでなく、移住者や他地域の住民を巻き込み、時代に合わせた変容を受け入れ、当事者が楽しむ仕組みをつくり、そして、日本の心である「畏敬の念」を後世へ伝えなければならぬ。そのために「まつり」という大切な地域の行事を、未来の持続可能な地域社会を支える「共創の場」として再定義し、未来へと繋いでいく決意を新たにす。「共創の場」とは、企業、行政、大学、各種団体、NPO、個人など異なる背景を持つ人々が境界を超えて集まる場であり、多様な人々が、人口減少や環境、防災など大小様々な地域の課題に真摯に向き合い、解決に向けて動き出す機会となる。

ある一つの地域で暮らす人々は、職業や家族構成、趣味など全く異なった背景をそれぞれが持つ。そういう個性的な人々が、「まつり」という行事でつながる。これはまさに有機的な共

創の場であるに違いない。それぞれ違った経験知を持つ人々が集まることによって、新しい地域づくりにつながる可能性が生まれ、同時に多様な人々がお互いを思いやることで濃密な相互扶助の仕組みが自然にかたちづくられる。

近江のまつりを支える各地域の事情は、個々に異なるため、一律に「まつり」の最善のあり方を提案することは不可能である。しかし、今、積極的に「まつり」のあり方を真剣に考える時が来ている。地域に暮らす人々が当事者となつて、「まつり」をこの時代に生きる行事として繋げていくために知恵を絞る、そのことを丁寧 に伝えていくことが、今、私たちに課せられた最大の責務であると考えている。

(令和七年度提言研究事業コーディネーター
文化・経済フォーラム滋賀 幹事 成安造形大
学芸術学部教授附属近江学研究所副所長 加
藤賢治)

二〇二五年度 文化・経済フォーラム滋賀の提言発表
この提言を、二〇二六年二月二十三日(月・祝)
の文化・経済フォーラム滋賀第十六回総会にて、担
当者である筆者が、「まつり」写真などをスライド
に入れて、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール小ホール
にて発表した。

まとめ

筆者は、近江で宗教民俗を研究する中で、さまざま
な民俗行事と出会い、そこで多くの人の繋がりを
眺めてきた。民俗行事は、その規模の大小はあれど
も、個人が一人で完結するものは一つも無い。複数
の人々が、見返りを求めない絶対的な奉仕の気持ち
を伴って協力し、成り立っている。そこには、精神
的身体的な健康につながる「拠り所」という存在や、
「畏敬の念」という大切な要素を伴っている。そして、
そこにしか存在しないというかけがえない地域文
化が見られ、地域のアイデンティティとして大切に
守られている。また、そのまつりが行われる地域に
は、個々の生業を超えてさまざまな人々が交流する
貴重な「共創の場」であることも確認された。

大切なことは、このまつりは、当事者であるその
地域の人々が主体となつて、楽しく、積極的に運営
がされねば続かない。第三者である我々が外側から、
「大切な行事なので続けてほしい」とどれだけ言葉
を重ねても、その存続に何の効力も無い。

しかし、我々民俗研究者ができることは、可能な
限り丁寧なまつりや民俗行事の意義を、ことあるご
とに現場で語り続けることしかできない。その実践
が、どこかで響き、伝統継承の少しでも助けになれ
ばと思うのである。

注釈

1.

文化・経済フォーラム滋賀は「文化で滋賀を元気に！」
を合言葉に、産官学民の各分野で活躍している人たちが
集まり発足した会員制の団体。「分野を超えて交流
を深め、経済と文化の活性化に会員皆様のお力をお借
りし、文化の薫り高い滋賀県の将来を築きたい」とい
う誓いをもとに、さまざまな「文化で滋賀を元気に！」
する活動に取り組んでいる。

2.

第一回 近江のまつりの課題と展望①(近江のまつり
の今とこれから 大津祭を対象に)
日時…令和七年七月九日(水) 十四時から十六時
場所…滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール研修室
講師…木津勝氏(大津市歴史博物館副館長)
船橋寛明氏(大津祭曳山連盟理事長)
コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、
文化・経済フォーラム滋賀幹事)

第二回 近江のまつりの課題と展望②(近江のまつり
の今とこれから 鎮守の神のまつりの今とこ
れから)

日時…令和七年九月十七日(水) 十四時から十六時
場所…滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール研修室
講師…市川秀之氏(滋賀県立大学教授)

3.

コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、
文化・経済フォーラム滋賀幹事)
第十八回文化ビジネス塾「近江のまつりの今とこれか
ら」地域文化と経済の好循環を目指して①
日時…令和七年十一月三日(月・祝) 十四時から十六時
場所…滋賀県立文化産業交流会館 第一会議室
司会…高梨純次氏(公益財団法人秀明文化財団 理事
文化・経済フォーラム滋賀幹事)
パネラー…市川秀之(滋賀県立大学教授)
高橋順之(伊吹山文化資料館学芸員)
對馬佳菜子(地域文化コーディネーター)

コーディネーター…加藤賢治(成安造形大学副学長、

参考文献

- ・『まつりは守れるか —無形の民俗文化財の保護をめぐる—』石垣悟編著 八千代出版株式会社 二〇二二年
- ・『看取られる神社 —変わりゆく聖地のゆくえ』嶋田奈穂子著 (株) あいり出版 二〇二四年
- ・『湖国と文化』一六八号「特集 近江の祭り 現在と未来」(公財) びわ湖芸術文化財団 二〇一九年
- ・『文化誌「近江学」十三号 祭り—よりどころ 成安造形大
学附属近江学研究所編 サンライズ出版株式会社 二〇二二
年

近江の懐をめぐる 9

美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川 亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's "Futokoro": Part Nine

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi, I will examine "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions: "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）の風土に根ざし、未来社会へ向けてものづくり、新たなライフスタイル、伝統の継承などを実践し発信している人々と、それを支える近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを目的としている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神、次世代につなげる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二六年一月現在まで三十五回の連載が継続されており、二〇二五年一月より二〇二六年十月まで第三十二回から第三十五回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

九回目となる「近江の懐をめぐる」研究に取り組

んだ二〇二五年度は、自身の新たな「さまよい」が始まった一年と言えるかもしれない。話は少しそれが最近、テレビ視聴が以前と比べ億劫になってきた気がしている。テレビ世代の私の家ではいつでもテレビが点いており、何となくその場を賑わす存在であった。そんなテレビが何となくさく感じ始めたのは年齢のせいだろうか、「見たくない、聞きたくない」と思うことが増えたように感じる。確かに自身の興味関心のあるコンテンツは、視聴したければいつでも動画共有サービスなどから視聴できる時代になった。自身が欲する情報やコンテンツは検索しなくとも「これでしょ！」と言わんばかりに目の前に提示される。気を抜いていると自身にとって好都合と思われる情報をいつの間にか掴まされるのだ。一方で二〇二〇年以降、コロナ禍、自然災害、気候変動、戦争など様々な社会課題と対峙せざるを得ない日常である。そんな現実を絶えず直視し続けるのも困難だ。このようなことを一人で考え、堂々巡りを続け急速回転する社会の渦に吸い込まれていきそうだ。

近江の先人たちは、おそらくいつの時代も渦中に巻き込まれそうになりつつも、湖国の風景に支えられ自身のスタンスを保ってきたのではないかと想像する。隣国に都を置き、変動する予兆を感じながら、

今日まで絶妙なバランスを保持してきたのだろう。二〇二五年は独自のスタンスで今日社会との関係に距離をとり、持続させる「場」に焦点を当てた。

はじめは湖西、比良山系の麓、木戸地区に位置するカフェに迫った。長らく隣国の都でカフェ文化を牽引したオーナーによる次なる新たな居場所の提案である。琵琶湖を一望できる平屋の古民家を、地元に移住した若手建築家と手入れして再生させた空間である。次に訪れたのは重要な文化的景観として知られる高島市大溝地区である。歴史を感じさせる街並みであるが、近年、空き家の増加が地域課題となっている。地元で建築設計施工を生業とする企業が、本社の隣の空き家をその再生活用モデルとして提案する試みに着目した。年に一度地域で開催されるマルシェに積極的に参加するなど、場の提案のみならず現地人であり当事者として、関わり続ける姿勢に注目した。三番目は近江八幡を拠点に全国展開する老舗菓子舗の新たな試みである。今や滋賀を代表する観光地の一つとなった店舗は、地域の風土と一体となり、生業を通してあるべき未来社会像を提案していると言えるだろう。前編では店内を彩る茶花ちやばなの制作現場から背景にある八幡山との景観形成までの試みを、それが老舗菓子舗を支える精神性であることとを紹介した。後編では敷地内で始まった有機農法の試みからサーキュラーエコノミーの実現を目指す姿を、生業と研究の実践と両立、そのトライアンドエラーの現場に着目した。老舗菓子舗が、地域と共に歩む未来社会を見据え、それを築くための準備と

捉えた。

二〇二五年もそれぞれのタイトルを場所の特異な事象と背景にある現地人の活躍を意味するものとした。土地（場所）の特性、条件によって臨機応変に対応する人々の気質に加え、その態度や姿勢、責任感を描写した。

一、新しい居場所

逃げ込む場所、隠れる場所、少しの間だけ関係を断つ場所が必要である。思い返してみると小学生くらいからだろうか、そんな場所をいつでも探していたような気がする。家から、学校から、仕事場から、人間関係から、社会から……。誰かに教えてもらうわけではなく自然にやっていたこと、むしろそのような居場所をどれだけ持っているかが窮屈な社会を生き抜く術のように考えることもできる。自転車に乗る行為も移動はしているが乗っている時間が居場所なのかかもしれない。その最中に新たな居場所を発見することが多いのも自身が「逃避モード」に入っていると言え。自宅から北へ琵琶湖を右手に見ながら一時間ほど走ったところ、ちょうど休憩がしたくなる頃に現れる居場所を紹介したい。

Doji (ドジ)

JR湖西線蓬萊駅あたりから湖岸を走る道がある。守山大津志賀自転車道線という名前の通りサイクリングにびったりな道である。左から正面に比良

の稜線を仰ぎ見、右手は琵琶湖の水平線が広がる。少し走ると木戸川と交差する橋を渡って山の方へ、木戸川沿いの林道を走り、国道を越えて少し登った傾斜地右手に小振りの平屋が見える。琵琶湖側は全てガラス面になっており、眺めの良さが想像できる。この近くで下宿生活する学生の話の断片に登場したのがこのカフェなのである。「最近できたドジっていうカフェがあつてその向こうに……」

私はその「ドジ」の音に直ぐに反応した。九十年代京都で学生生活を送っていた頃、課題や制作に集中できず逃げるように入りこむカフェ。中でも少し気取って特別に行く場所であった。京都北山、加茂川近くに位置する当時の呼び名「Doji House」である。そこは普通の喫茶店とは違い、建築、植生、内装、家具、器に至るまで店主のこだわりが發揮された空間（Doji space）だった。扉を開けると大きなテーブルが目に入ってくる。そこには色とりどりのフルーツがどさつと並べられ、華やかな気分を迎えてくれる。そして西欧製だろうかクラシカルなテーブル席やバリ製の無骨で不思議な形のテーブル席など、様々な席から選びだし「スッ！」と腰をかけるのだ。工夫を凝らしたメニューで人々を喜ばせ、何かワクワクする場所でありつつも落ち着いた雰囲気だ。その空間でお茶を飲み、背伸びした自分に酔いしれる場所でもあった。

「もしやー」と思いつつも当時の匂いがプンプン漂う。平屋の扉を開けると、やはり見覚えのある人が仕事をしている。木製の大きなカウンター席は形

を変えて健在だ。「お好きな席へ」と導かれ、琵琶湖が見える大窓の前にデッドストックであろうかモダンデザインの椅子に腰かけた。水平線の向こうに見える三上山から湖面を経由して比叡比良の山並みを一望しつつ、「あのDojiがこんなところでよみがえってるやんか!」と心で叫んだ。コーヒーを注文すると「ひよっとして北山の店に…?」と声をかけていただいた。「ハイッ!」と即答、それから是我慢で勝手に思い出話をこちらからしてしまっただ。その日は興奮状態で一旦帰途。以後季節の変わり目に何度か訪れ、二〇二四年の年末に改めて取材をお願いすることにした。

Doji店主の宮野堂治郎さんとパートナーのみどりさんにお話を伺うことができた。二〇二三年四月に開店、以前は別のオーナーがここでカフェを営んでいたそうだ。前回「やりすぎない古民家再生」を紹介したがその続編になりそうだ。宮野さんがおっしゃるにはこの「大テーブルの設置と床の変更くらいです」と。もう一つのビジネスであるビンテージもののインドネシアの家具、雑貨などの買付け、顧客依頼者から求められる空間イメージのマッチングも行っている。店内はバリのもの、和物、欧米製の家具、雑貨の組み合わせが絶妙である。以前の

「Doji-style」健在^{ひなび}とでも表現しようか宮野さんのセンスが近江の鄙美^{ひなび}と組み合わせる独自の世界観を作っている。極めつけはトイレだ。奥の方に大きな観音開きの扉が見える。そこを開けるとコバルトブルーの眩しい部屋が見えた。四角い洗面台から続く

排水経路も面白い。

さて、冷静になってその経緯を聞くと北山のお店は二〇一〇年十二月に閉店、それから三年程、伊勢、丹後など次の場所を探しておられたそうだ。パリでイタリア料理のシェフ夫婦とレストランカフェを開店していた時期もあったそうだ。休憩期間を経て十一年前にこの辺りに移住。「住まいは湖岸で、店は山で」という構想で二〇一七年頃、琵琶湖の見える場所を探していたところ、今の場所にたどり着いた。決断後、店舗の近くに鎮座する樹下神社でお参りをしたところ、私と同じく北山の「Doji-house」を居場所としていた客で、数年前にこの辺りに移住した建築家岡山泰士^{おかやまのし}さんと再会したことをきっかけに、話はとんとん拍子に進んでいった。岡山さんによって図面が引き直され、古民家の魅力を活かし、床とビンテージチーク材のテーブルの新設に留めた新生「Doji」が生まれた。

その名は「ドジな僕ら」と堂治郎さんの名前がかかっている。店を出る時に「ひよっとしてこの扉?」とつぶやくと「そうー北山の時の使ってますよ」と堂治郎さん。いただいたコーヒーの黄色いカップアンドソーサーも北山の時のものだったことを思い出した。



写真5 家具、雑貨の組合せが面白い「Doji-style」



写真3 店内より一望できる近江



写真1 琵琶湖の見える居場所「Doji」



写真6 宮野堂治郎さんとみどりさん、岡山泰士さん(左)



写真4 チーク材のカウンターテーブルと床



写真2 見覚えのある人が仕事をしている



写真8 パリのテーブルとコーヒー



写真7 極め付けの居場所 (トイレ)



写真9 見覚えのある扉

二、新しい居場所二

居場所の定義は難しい。逃げ込む場所、隠れる場所、少しの間だけ関係を断つ場所などと書いてはみたが、それでカバーできているだろうか。否、やはり誰かと何かを共有できる場所こそが居場所ではないだろうか。人は一人では生きていけないのだ。一瞬の間、退避しながらも、その場に一人で居ようが誰かを意識し、つながっているからこそ、或いはそこから戻れる場所があるからこそ、一時の居場所が成立すると考える。カフェでも本屋でも休憩所でもない、目的を共有し、方向性を想像し、関係をつくる場、そんな新しい居場所を見ていきたい。

Rin Takashima (リン タカシマ)

またしても学生に導かれてたどり着いた場所であ

る。二〇二四年十月末の休日、湖西線近江高島駅を下車して街中へ、大溝陣屋総門を拠点に住民が企画する「大溝まちづくりマルシェ」と、この地で建築設計施工から空き家再生まで総合的に取り組む株式会社澤村(以下SAWAMURA)が企画する「SAWAMURA マルシェ」のコラボレーションイベントが展開されていた。駅から北東方面へ高架沿いに少し歩くと、SAWAMURA 本社が見えるが、その隣にある元自転車屋さんが今回の居場所だ。軒先の看板は「ブリヂストン自転車」の表示がそのままになっているが、店先には「作業着を着た大将」ではなく、なんとも良い匂いを漂わせ、丁寧にコーヒーを淹れる人がいる。チャットと建物の中を見ると「修理中の自転車や工具が並び」ではなく、バーカウンターにコーヒー豆が並び、壁際に書棚が設置され、スマートな雰囲気が見えた。その日は浅煎りのコーヒーを注文し、スッキリした味わいを楽しみながら退散した。二〇二四年十一月にオープンしたオープンインベーションベース「Rin Takashima」を紹介する。

二〇二五年四月末、自転車屋跡地をプロデュースした総合設計会社SAWAMURAの代表取締役、澤村幸一郎さんと住環境事業部設計担当の石原由貴さんにお話を伺うことができた。

まずは澤村さんから場づくりに対する思い、理念をお聞きした。本社の隣にあることから社のリフォームのモデルハウスを計画していたがそれだけでは面白くないと考えていたそうだ。ここは街の自転車屋さんであったことから、ちょっとした修理や

空気入れなど街の誰もが気軽に立ち寄れる場所であった。その姿を新しいかたちで具体化したいと考え、自社だけで運営するのではなく誰かと共創しながら場を醸成させようと考えついた。高島市にはこの地に魅力を感じて近年移住してくるクラフトマンやクリエイターが増えている。次に住み易さに加えて環境の良さから興味関心を持ち注目する人も増えている。そして何より自身も含めた現地人だ。「この三種類の人々が点在する中、線つながり面で広がる場にしたい」と澤村氏は熱く語る。まずは「つながりづくり」の場として京都でソーシャルインベーション企画に携わる「ケノビ株式会社」とのコラボレーションが始まる。企画も自社のみで進めず立ち位置の違うステークホルダーとの共創が面白い。また、そこには珈琲焙煎の「株式会社タビノネ」が加わり、つくりあげていく仕組みも興味深い。

次に具体的な空間づくりについて石原さんからお話を伺った。まずは一階玄関の土間空間にあるコーヒースタンド「MAMEBACO」である。ここに立ち寄る度に必ずコーヒートを注文してしまう。一杯ずつ丁寧に淹れるコーヒの香りや挽きたての味は、何となく急ぎ気味で浅い呼吸の自分を落ち着かせてくれる。入って右側には書棚が玄関から奥まで連なっている。コーヒー片手に本を見ながら気づけは奥の空間に入り込んでいる。「既存の店舗と住居の仕切りを取り除いてこの空間全体の魅力を感じて欲しいのです」と石原さんは語る。見上げれば柱や梁はそのまま残し、塗料のベンガラ色も残している。

書棚と反対側には一段上がってコワーキングスペース「LOCAL NOMAD」があり、三角形のテーブルと椅子が配置されている。このインタビュもそのテーブルを合体させて始まった。会議体の人数によって大きさを変えられる仕様だ。さらには新調した壁材は素材感を残し丁寧貼り合わせるなど、化粧板や余計な材を使用しないようにデザインされている。場所によっては土壁が残されているなど高島の古民家に残る魅力が引き立つように工夫されている。タビノネとSAWAMURA、デザインと設計施工、双方の大切に思う価値の融合がここに表現されている。書棚の基礎となっている土間も一段上がっており、よく見ると店先の窓を突き抜けてエンドは円形に仕立てられている。これも内と外をつなげる要素の一つだ。コーヒースタンドの後ろ側には天井からキラキラした透ける素材が仕立てられている。「これは中に入った時にギャップを感じて欲しかったのです。」と石原さん。さらに見上げると高島ちぢみが生地そのまま暖簾のように数枚吊るされ、時折入る風で揺れていて、玄関左側には外に突き出た階段があり、中二階のショールームにつながる。

この場をSAWAMURAだけでつくってしまわずに様々な人と関わりながらつくろうとする澤村さんの想いが伝わってきた。様々な業態、職種との共創から若手社員が積極的に発言して仕事ができる場づくりが展開されている。そしてその空気感が様々な人をこの場に招き入れる共創のための新たな居場所となっているのだ。「Rin」は自転車の「輪」か

ら新たな「わ」つながりを意味している。



写真 12 コーヒースタンド「MAMEBACO」



写真 10 大溝の新しい居場所「Rin Takashima」



写真 13 コワーキングスペース「LOCAL NOMAD」



写真 11 プリヂストン自転車の看板を残す Rin の玄関



写真 18 右から澤村さん、石原さん、和田さん
(ブランドコミュニケーション課)



写真 16 内と外をつなぐ土間



写真 14 中二階のショールーム



写真 17 内と外をつなぐ階段



写真 15 高島ちぢみが揺れる空間

三、新しいファーム

近江八幡は「近江の懐」の最深部と言っているだろう。

朝鮮人街道（県道二号）を北上して白鳥川を渡った小船木橋交差点より、湖岸方面へ少し進むと突如として斜め方向の道が現れる。本願寺八幡別院へと続くこの道は朝鮮通信使を手厚く歓迎したことで知られる。この道の始まりは安土城築城の際に信長が京までの道をつなぐことによる。近江は街道の国であることは言うまでもないが、この地に様々な人物資、情報が集約し、いつの時代も次代の予見を想像できる場所と言える。

株式会社キャンディーファーム

この地を象徴する八幡山の麓に山から田畑へとつながるように佇む老舗菓子舗たねやとクラブハリエのフラッグシップ店「ラコリーナ近江八幡」がある。二〇一五年に開店して以来、滋賀県を代表する観光地の一つとなった。お菓子を「食す」だけでなく、それを通じて土地（場所）の歴史や空気を表現でき、お菓子だけに留まらない何かを伝えている。その特徴は自然の素材を中心とした建材で施された建築、空間に見てとれる。その代表が屋根を緑で覆い尽くしたメインショップ「草屋根」だ。ここを潜り抜けると正面に田んぼが広がり右手に銅葺屋根の本社が見える。姿形は新しいがどこか懐かしい雰囲気。イメージさせる不思議な感覚に陥る。整え過ぎず

野放しにしない庭、景観で迎え入れるこの感じは何か。たねやグループ広報室の黒川志歩さんに案内していただいた。

たねやグループはお菓子の製造販売から、その背景にある環境、食、暮らしなど近江を舞台に未来社会の在り方の新たな提案、挑戦をしてきた企業と言えるだろう。創業は一八七二年、地域の人々が前身の商いから「たねや」と呼んだことに始まる。畦道を歩き棚田のある小高い丘を抜ける小道を進むと木々の間に湾曲した平屋が見えてきた。この屋根も一面、草に覆われている。二〇一三年より「たねや農藝」としてスタートした核心部「キャンディーファーム」だ。中は土間となっており中央に水場が設けられている。そこでスタッフの皆さんが草花の手入れや管理など各々が作業を進めていた。奥の板の間で園長の木村千鶴さんに会うことができた。二人の後方の四角く切り取られた窓枠の向こう、色濃くなつていく緑が美しい。「キャンディーファームは名誉会長であった山本徳次が、仕入れるよもぎの加工工場を訪ねた時、マスクをして洗浄作業をする姿を目にしたことから始まります」。自分たちが口にする（販売する）ものがどこでどんなふうにつくられたかわからない材料であつてはならない。この地を表現できることは何か、ラコリーナが建つ以前、一九九八年によもぎを自社栽培する「たねや永源寺農園」が設立。続いて二〇〇三年には愛知川の工場横に「愛四季苑」が設立し、各店舗を彩る茶花の自社栽培が始まった。里山や野原に自生する季節

の草木や花などを育て、たねやの思い描く近江の自然を表現している。二〇〇九年より八幡山の森とラコリーナの景観の一体化を夢見る「どんぐりプロジェクト」が始まる。それは十万本の植樹を目指し現在五万本まで達成している。木村さんより日々の取組みを伺った。茶花づくりと展示を軸に据え、有機農法による野菜や米づくり、八幡山とのつながりをつくる景観管理、野草（在来種）の管理、昆虫の生態系回復、お菓子を製造する際に発生する有機汚泥を活用する循環堆肥の試みなど、仕事の幅が広がり話は営みへと膨らんでいく。キャンディーファームのすべての活動は地域全体の環境、景観づくりの活動につながっていると気付いた。

さらに話は近江八幡と琵琶湖をつなぐ水郷とヨシ群生による文化継承に移っていく。ヨシ刈りから地域の伝統であるヨシ松明づくりへ。春の五穀豊穣を祈る松明まつりでは、市内の各地区で様々な形や大きさの松明が揃う。自然と共に生き、支え合ってきた地の民によつて育まれた文化である。地域の学生を巻き込み一緒につくるなど、近江の祭と銘打ちラコリーナ内のイベントとして定着している。これは地域伝統の継承とつながりの学びが一体化している。「自然に学びながらさまざまな人やものを受け入れることからかな」と木村園長。

また、ラコリーナの道向かいにある田んぼにて他社企業や大学と一緒に手作業での田植えや稲刈り体験を行い、新たな生業や学びのつながりをつくっている。黒川さんは「実はラコリーナの敷地内に

ある田んぼでは、入社二年目の社員全員がこの田植えを体験します！」と話された。この体験が後々、社員の糧となるようだ。自分たちが販売するお菓子の原材料がどのようにしてつくられるか、お客様に對して身をもって伝えることができるのだ。今日の社会では効率重視のサプライチェーン化が横のつながりを見えにくくしている。生産からサービス、さらには企業ビジョンに留まらない目的の提案がこの場所でも育まれていると感じた。「この経験があるから一緒に仕事をしている人たちは同じ方向を見ていると思う。」と木村園長。ここに辿り着くのに、様々な挑戦と失敗をしてきているのだろう。ものづくりには失敗がつきものである。失敗を恐れ、失敗してはいけない今日社会に対し、人との関わり、自然との関わりを追求する企業、ファームであるからこそ「挑戦と失敗の最先端」を歩めるのであろう。二〇二三年より農芸部門の社名をキャンディーファームとした。お菓子屋さんの農場を意味している。「時代の中で成長しているか戻っているかわからないです。すね！」と二人は向き合った。



写真 23 小道の向こうのキャンディファーム



写真 21 ラ コリーナ近江八幡内の田んぼ



写真 19 銅葺屋根の「たねや本社」



写真 24 木村園長と黒川さん（広報）



写真 22 小道の向こうのキャンディファーム



写真 20 たねやを彩る茶花

「失敗は成功のもと！」と何度も親から励まされたことを思い出す。
 小学二年生頃であろうか、初めて釣り道具を手にしたのだが、竿、釣り糸、ウキ、針、オモリなどバラバラで買ってもらい、魚釣りの仕掛けを自分でつくるように言われ、悪戦苦闘して仕掛けを作ったこ

四、続・新しいファーム



写真 27 キャンディーファームの入り口



写真 25 キャンディファームの中



写真 26 キャンディファームの中

とを思い出す。便利な初心者セットは販売されていたが、必要なものだけを買えばいい、その後、必要に応じて自分の小遣いで買い足していった記憶がある。竿先に糸を結びつけるだけでも最初は時間をかけてやっと取り付けることができた。漸く仕上がった仕掛けを釣り場を使うのであるが、竿と糸のバランス加減がつかめず、アツという間にオマツリ（糸が絡まる）状態に。すぐさま現場で仕掛けを作り直すのだが、気づけばすでに陽が落ち、釣りどころではなかった。そうやって何度か釣り場でさまざまな失敗を繰り返して、魚一匹を釣り上げるのに半年はかかったことを思い出す。振り返ると、魚が釣れだす頃には、仕掛け作りや釣り場の見定め、段取りなど様々な条件をクリアできるようになっていた。

続・株式会社キャンディーファーム

さて、前回に続き、菓子舗たねや・クラブハリエの農業生産法人キャンディーファームを再見したい。前回取材時に炎天下の中、農地で作業をする若いスタッフがいた。「挑戦と失敗の最先端」という締めで終わったが、正にその最中の当事者と直接対話したいと思い再訪した。その人、鬼海航太さんにお話を伺った。開口一番「いやあ、ほとんど失敗ですよ！」と苦笑いしながら話し出した。入社して六年目。最初の三年は販売職に、お客様やスタッフと対話しながら自身の立ち位置を知る。そして希望するキャンディーファームに配属され現在に至る。

東京の農大で昆虫を研究対象とするバイオミミク

リー（生物模倣学）を専攻していた。研究の一つ、カプトエビ農法は雑草の新芽を食べることにより除草効果が期待できるのだが、減農、無農薬での稲作は、カプトエビの生息を見ることが環境の健全性を示す指標となっている。このような実践と研究を学生時代の恩師と、近江八幡の地で研究できたことが「お菓子を製造するだけの企業では無い！」と、たねやグループ入社へとつながっている（現在もここで恩師と共に大学と企業の共同研究が継続している）。

入社してすぐに「製造・販売・農業まであるこの会社でそれぞれの専門分野を極めよ」との社長の言葉が今でも精神の支えになっている。はじめの経験として、ラコリーナ内の園路舗装の話から始まる。これは一見、田舎の畦道を想起させるが訪れた人が歩きやすく且つ、背景の八幡山との景観が考慮されていることがわかる。コンクリートと真砂土が絶妙なバランスで調合されている。最初は施工会社の職人の手により整地されたが、その後は自分たち社員の手により修繕されていくのだ。土や水の分量が多いと崩れやすくなるなど、直ぐに上手くいくわけではない。その日の湿度などにも影響され、日々面倒を見ながら「手入れ」する自然との対峙が始まっているのである。その目線で園内を見ていくと、草屋根の雨どいや柱など至るところで手入れが日々されていることに気づく。逆に通常の建材はこれらの経験値からメンテナンスが容易で安価、効率がよく消耗品の取替が効くようにつくられているのだ。そ

うではなく、わざわざ面倒な方を選んでいくところ、訪れる人の見えるところで日々作業を行うところも面白い。次に敷地内の田んぼで実証を行うアイガモロボットの話である。減農、無農薬の稲作は日々の除草が戦いのメインである。ラコリーナでのアイガモロボットによる除草は二〇二四年から始まった。最初の年は水嵩が足りなかったことにより、除草が効果的に進まなかったそうだった。二〇二五年は田起こしの段階から水嵩を一定に保てるよう深くしたことにより、除草作業はうまくいった。さらにアイガモロボットの除草作業には水と土を攪拌する作用があり、そのことによって水田内に酸素が送り込まれ、栄養を供給してくれる微生物の活性化につながり、収量増加へ導く結果が得られたそうだった。機械導入は一見、農業の工業化を想起させるが、人間の「手入れ」の範囲、知恵や工夫は数値やエビデンスとは違う結果と恵をもたらすのだ。

この他、ナノバブル（超微細気泡）農法の研究と実践も進めている。その効果は土壌への浸透性が高くなること、作物の栄養吸収を助けるなど、収量、品質の向上が期待できる。キャンディーファームで収穫される作物が即座にお菓子の原材料となり、収益につながるわけではない。しかし農地を保持しながら活動を続けることで近江八幡の景観保全や、リスクの高い減農、無農薬農業のトライアンドエラーによるデータ蓄積、大学との共同研究など地域企業にしかできない役割を果たしていると言えるだろう。



写真 28 ラ コリーナ内の園路



写真 29 田起こしからやりなおした水田



写真 34 ラ コリーナ内の農地



写真 35 ラ コリーナ内の農地



写真 32 八幡山と一体化するラ コリーナ内の景観



写真 33 畦道に立つ鬼海さん



写真 30 鬼海航太さん



写真 31 キャンディーファームが保持している農地

近江八幡でやる拘り、大規模農業とは違うやり方でこの地を蘇らすことなど「このような技術的検証をたくさん試みることで農業従事者を増やすことができれば」と鬼海さんは夢を語る。ラ コリーナを訪れる人々のことを考えることから話は始まり、近江八幡の景観やこの地を持続させる話へと大きく話は膨らんでいた。

このような思いや考えが生まれるには、地域の企業、行政、連携する大学、そして文化的景観第一号をもつ近江八幡の持つポテンシャルの高さである。前編の最初に戻るが庶民の信仰のよりどころである本願寺八幡別院が存在することも、為政者が統治することのできないコモンズがこの地を持続させていることを証明しているように思う。

追記

紀要の冒頭は、二〇二六年、年始の自身の心境と二〇二五年の活動を振り返りながら思いを書き綴ってみた。テレビ世代の私が正月番組においてその気分を味わう余裕がなくなってきたことに気づいた。情報とは、とるべくして自身がとりに行くものと、何となく目の前を流れ見聞きするものがあるだろう。ここでは後者を受け入れにくくなったのか、興味関心の薄い情報も何かのキーワードが切欠となりつながっていないかった事象と関係する可能性がある。その気づきが新たな考えの発生や、これまでの蓄積とつながることが気持ちよかった筈である。もしや自身にとって都合の良い情報しか受け入れられない状況にあるのか、とも考えてしまう。現実を直視する苦しさあまりに、自身の興味関心に寄せた情報ばかりを受け入れ、都合よく解釈したいものである。

二〇二五年の「近江の懐」は流布される情報と絶妙な距離を置き、他人事を自分ごとのように思い込んで大きな渦に巻き込まれることなく、本当の自分ごととは何か、それに向き合おうとする個人、地域、企業の有り様に迫った。二〇二五年末には厳しい現実も耳にした。大溝で紹介した共創スペースのコーヒースタンドが十二月末をもって撤退を決めたそうだ。全国のあちこちの地域に広がりをもせるコーヒースタースタンドは、その地域の独自性と呼応して安堵のひと時を生み出している空間だ。実際、

私も様々な地域を訪れた際にハンドドリップで淹れるコーヒー店を探し、コーヒーを飲みながら地域の生情報を入手している。コーヒーは人々と地域を結ぶ大切なエレメントといえるだろう。このような場は目的の有無を問わず誰もが立ち寄れる「居場所」であり、そこは新たな切欠と想像を生み出す「ファーム」であるのではないかと考える。撤退を決めた理由はいくつかあるだろうが、この試みは始まったばかりであり、地元の企業が設定した相互乗り入れができる仕組みが重要だ。空いた場所にまた新たなステークホルダーが参入できる可能性を残し、現実としての「場」を設けることで様々な立ち位置の人間が関われる可能性をつくっている。

さらに付け加えるなら、このような場を応援しながら存続できるような空気をみんなで作っていくことだろう。近頃は目的が無くとも、何気なく立ち寄れる場所、立ち寄っても許される場所の存在が、今後さらに重要視されるのではないかと考えている。

近江学ラジオとキーワードマップの試み

—MUSUBU座から広がる現代の「座」と「講」—

成安造形大学講師／成安造形大学附属近江学研究所研究員

美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

田口真太郎
石川 亮

近江学ラジオとキーワードマップの試み —MUSUBU 座から広がる現代の「座」と「講」—

成安造形大学講師／成安造形大学附属近江学研究所研究員 田口真太郎
 美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員 石川 亮

第一章 はじめに

本稿は、成安造形大学附属近江学研究所における新たな実践「近江学ラジオ」と、その成果として制作された「キーワードマップ」について報告するものである。近江学研究所はこれまで、文化誌『近江学』の刊行を中心に「惣・座・講」という視点から地域社会の成り立ちやその現代的意義を探究してきた。その中で、研究成果をより広く共有するため、書籍や展覧会に加えて音声メディアを用いた発信を試みたのが「近江学ラジオ」である。

近江学ラジオは、展覧会「近江学MUSUBU座『火水木から考える』」の関連企画として位置づけられ、和ろうそく（火）の大西巧、桶（木）の中川周士、湧水（水）を担う石川を含む三者が出演した。石川は湧水に関する視点を担うと同時に全体のファシリテーターを務め、全九回の収録を通じて、素材や技法へのまなざし、学びと継承の方法、地域文化と身体性、現代におけるコミュニティの在り方などが語られた（図1）。

しかしながら、対話の記録はそのままでは散漫に見える側面もある。そこで筆者らは、収録内容を基盤としてキーワードを抽出・整理し、可視化を試み

た。その成果が「近江学ラジオキーワードマップ」である。収録で語られた多様なテーマを相互の関係性から整理し、六つの根源的な問い（素材と自然／工芸性と人間／学びと継承／地域文化と身体／コミュニティの形／工芸と社会）へと展開することで、ラジオでの対話を研究資源として位置づけ直すことを目指した。

本稿では、まず「惣・座・講」研究プロジェクトの文脈を整理し、その中で提示された「MUSUBU座」と近江学ラジオの関係を述べる。続いて、収



図1 成安造形大学附属近江学研究所の公式 YouTube チャンネルで公開された近江学ラジオ番組一覧 (2025年9月時点、スクリーンショット)

録の実態とキーワード整理・マップ制作の過程を報告し、最後に公開講座で得られた来場者の意見を踏まえた考察と結論を行う。

第二章 「惣・座・講」研究プロジェクトの文脈

近江学研究所は、二〇一八年に「里・川・祭」研究プロジェクトを立ち上げ、地域の暮らしや自然環境に根ざした共同体の姿を検証してきた。その延長として、二〇二三年度からは三カ年計画で「惣・座・講」を特集テーマに掲げている。すなわち、地縁に基づくコミュニティ惣、生業に基づくコミュニティ座、互助や趣味・嗜好によるコミュニティ講という三つの観点から、近江の社会と文化を歴史的・現代的に読み解こうとするものである。

このうち「座」は、中世・近世における職能者集団や芸能集団の同業組織として理解されてきた。近江学研究所では、この「座」を現代的に再解釈し、地域に根ざした生業を担いながら新たな展開を見せる人々を「現代の座」として提示している。その具体例が、石川が文化誌『近江学』第十六号において示した「近江学MUSUBU座―現代の生業のコミュニティ―」である。

MUSUBU座は、二〇一一年以降の公開講座「近江のかたちを明日につなぐ」や、二〇一五年の滋賀県事業「MUSUBUSHIGA」による淡水真珠ブランドینگを契機に育まれた作り手同士の共

創の延長にある。それまで個別に活動していた職人およびクリエイターが相互に刺激を受け、技術や背景に潜む物語性を再認識する場となった。二〇一八年に成安造形大学で「地域実践領域」が発足すると、作り手たちは教育・研究活動に関わりつつ、自らの生業で社会的評価を高め、確固たる「座」としての位置を確立した。

第三章 近江学ラジオの試み

本研究ノートで扱う「近江学ラジオ」は、このMUSUBU座の延長として企画された実践である。特に桶職人の中川周士(木)、和ろうそく職人の大西巧(火)、湧水の研究を続けてきた石川(水)の三者に焦点を当て、「火・水・木」という象徴的要素を起点に据えて対話を展開した。

近江学ラジオは全九回のシリーズとして構成され、前半六回は石川をファシリテーターとした三者対談で、素材の特性や技術継承の方法、手仕事を取り巻く社会環境などが語られた。第七回以降は、田口が出演者として加わり、それまでの議論を整理しつつ新たな問いを提示して、対話をより深めていった。

さらに、第七回の収録に際して田口が作成した「テーマ整理図」が共有され、議論を俯瞰する契機となった(図2)。これにより出演者は自身の語りの位置づけを再確認し、MUSUBU座の趣旨に立ち返りながら収録後半を進めることができた。した

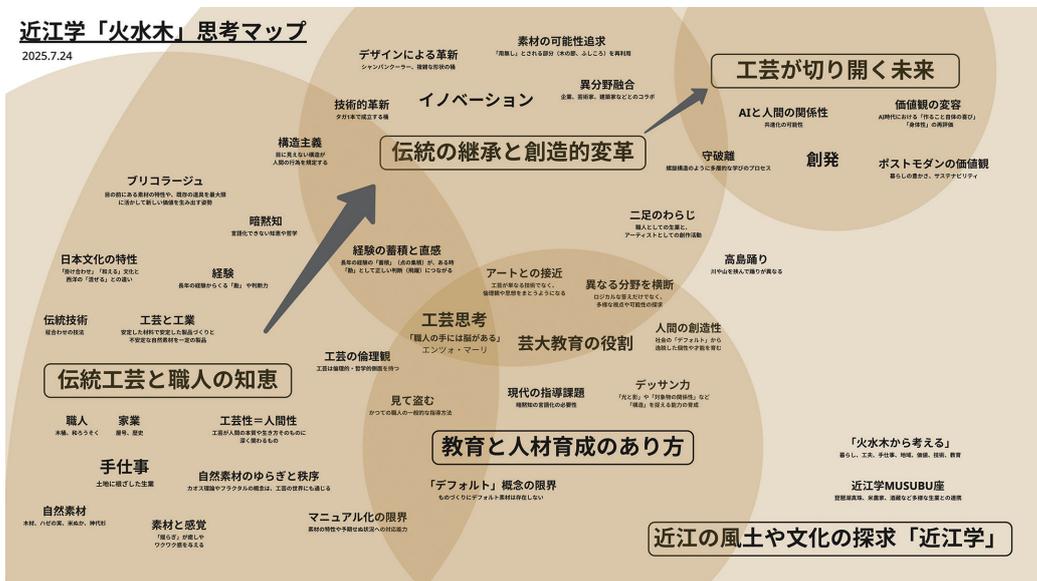


図2 近江学ラジオ第七回の収録に際して作成したテーマ整理図(田口真太郎作成、2025年)

がって近江学ラジオは、音声コンテンツにとどまらず、研究テーマを再構築する実践の場として機能したと言える。

第四章 キーワード整理とマップの制作

近江学ラジオの全九回にわたる収録では、素材や技術、学びの継承、地域文化や共同体の在り方など、多様なテーマが語られた。しかし、音声のみの記録では議論の広がりや関連性を把握するのが難しく、全体像を共有するには別の手法が必要であった。そこで筆者らは、収録内容を整理し、キーワードとして抽出・可視化する試みを行った。

第一段階として、収録で語られた言葉や概念を可能な限り網羅的に拾い上げ、分類ごとにまとめた「テーマ整理図」を作成した。ここでは「手と素材」「学びと継承」「祭とつながり」「生き方と知」といったクラスターが見いだされ、出演者自身の語りを振り返る手がかりとして機能した(図3)。

第二段階では、この整理図を基盤に「キーワードマップ」へと再構成した(図4)。マップでは単なる分類の羅列にとどめず、中心に問いを据える形式を採用した。すなわち「近江の手仕事と人・自然・社会をどう結び直すのか」という総合的な問いを中心に置き、そこから六つの根源的な問いを放射状に展開した。具体的には、以下の六つである。

- (一) 素材と自然
- (二) 工芸性と人間

(三) 学びと継承

(四) 地域文化と身体

(五) コミュニティの形

(六) 工芸と社会

各柱の周囲には、収録で取り上げられた具体的なキーワードを配置した。たとえば「素材と自然」には「火・水・木」「偶然性」「廃材の再解釈」などが、「学びと継承」には「見て盗む」「守破離」「雑木林的教育観」などを位置づけた。これにより、出演者の発話は問いとの対応関係の中で再編成され、ラジオ全体の射程を一望できる構造を提示した。

このキーワードマップは、出演者との共有を通じて議論を再整理する契機となっただけでなく、展覧会や公開講座において大型出力や配布資料として活用できる成果物ともなった。すなわち、ラジオでの対話を一過性の記録にとどめず、研究資源として蓄積し、展示・教育・社会発信へと展開するための基盤となった。さらに出演者自身にとっても、暗黙知や経験として語られてきた内容が整理され、共有可能な知へと再確認される契機となった。



図3 近江学ラジオ全九回の内容を整理したテーマ整理図(田口真太郎作成、2025年)

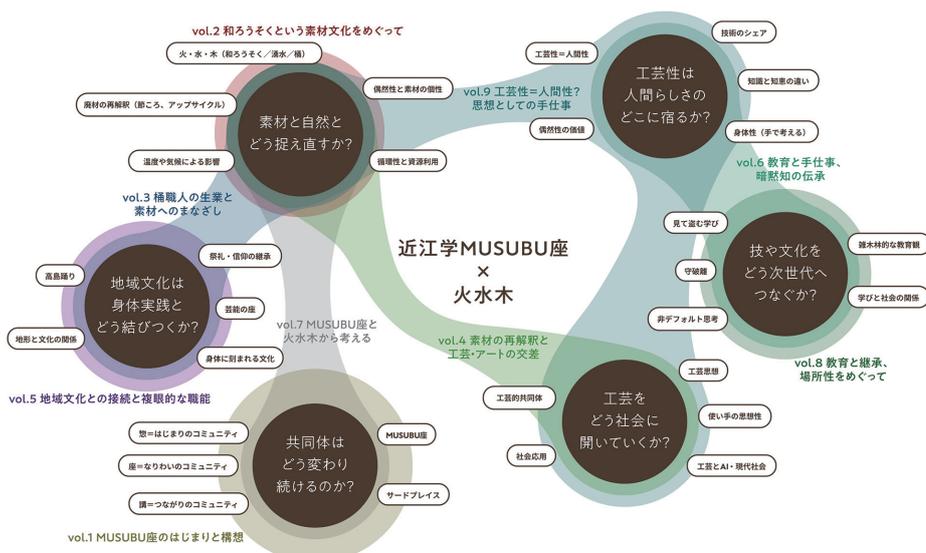


図4 近江学ラジオの全九回の内容を整理したキーワードマップ (田口真太郎作成、2025年)



図5 2025年9月13日開催の公開講座「近江学 MUSUBU 座『火水木から考える』」の様子 (撮影：永江弘之、2025年9月)

第五章 公開講座での検証

本研究の成果であるテーマ整理図とキーワードマップは、二〇二五年九月十三日に開催された公開講座「近江学MUSUBU座『火水木から考える』」においてお披露目された(図5)。この公開講座は、「キャンパスが美術館開館十五周年記念展覧会『近江学MUSUBU座『火水木から考える』』の関連企画として実施され、会場のギャラリーでは数日前



図6 展覧会エントランスに展示されたキーワードマップ (A1サイズポスター/キャンパスが美術館会場、撮影：真下武久、2025年9月)

からA1サイズに出力したポスターを展示し、来場者がラジオを聴きながらマップを参照できる環境が整えられていた(図6)。講座は午前中に実施され、ラジオ制作の経緯やキーワードマップの趣旨を紹介した後、会場との意見交換が行われた。午後からは出演者による実演や解説を交えたワークショップが展開され、参加者は図と体験を往復しながら理解を深める機会を得た。意見交換の時間には、来場者から多様なコメント

が寄せられた。第一に、修理と継承に関する視点である。ある来場者は「桶や傘などの日用品は、かつて修理を前提に長く使い継がれてきた。修繕こそが文化継承の基盤ではないか」と発言した。これに対して中川周士は、実際に二百年近く前の桶の修繕を依頼された経験を紹介しつつ、「板を一枚ずつ交換していけば、原理的には桶は永久に使える。修理こそが工芸の思想そのものだ」と応答した。

第二に、癒しとしての工芸という観点が示された。来場者の一人は「文化の本質は癒しにあるのではないか。和ろうそくの炎はその象徴になり得る」と述べた。この意見を受け、大西巧は「和ろうそくはかつて祈りの場の明かりを担ってきた。時代ごとに与えられる役割は変化するが、現代においても、光が果たせる役割を探り続けたい」と答えた。このやり取りは、伝統が固定されたものではなく、社会との関わりの中で変容し続けることを示唆していた。

第三に、生活とジェンダーに関する指摘があった。女性の来場者からは「桶やろうそくは生活用品であり、日々使いこなししたのは女性だった。文化の継承には生活の視点が不可欠であり、そこに女性の目線が反映されていないのは不十分ではないか」との意見が出された。中川はさらに、「優れた使い手もまた工芸家である。作り手だけでなく、使い手の知恵が文化を支えてきた」と語り、工芸を「作る文化」と同時に「使う文化」として捉える意義を強調した。さらに大西も「工芸は思想であり、作り手と使い手の双方がその思想を担う主体となる」と述べ、今後

の議論に多様な視点を取り込む必要性を認めた。

これらの意見交換は、キーワードマップを提示したことで可能になったものである。マップを媒介とすることで、出演者と来場者が議論の全体像を俯瞰し、それぞれの関心や経験を重ね合わせることで、ラジオ収録時には顕在化しなかった魅力を深掘りし、新たな視点を共有することができた。特に「修理」「癒し」「生活・ジェンダー」といった観点は、既存のマップには含まれていなかったが、今後MUSUBU座を軸にラジオを継続していく際の切り口やゲスト選定の参考となる重要な示唆であった。

公開講座は、研究成果を一方的に提示する場にとどまらず、社会との相互作用を通じて研究を拡張する場として機能した。キーワードマップを媒介とすることで、出演者は自身の語りを整理し直す契機を得て、来場者は初めて触れる内容に率直な意見や疑問を投げかけることができた。その結果、議論はより立体的に展開し、研究の次の展望や新たな気づきを見いだすことができた。

第六章 考察と結論

本研究ノートでは、「近江学ラジオ」と「キーワードマップ」の制作・提示を通じて、近江学研究所の新たな研究実践のかたちを報告してきた。以下では、今回の試みから得られた意義と今後の展望を整理する。

第一に、MUSUBU座の現代的意義である。M

USUBU座は、文化誌『近江学』第十六号で提示された「現代の生業のコミュニティ」としての概念であり、信頼や共感を基盤とした横断的ネットワークとして構想された。今回のラジオは、その具体的な実践の一例として「火・水・木」に関わる三者の語りを深め、MUSUBU座の理念を具体化したものであった。

第二に、ラジオという場の実験性である。講義や講演ほどフォーマルではなく、雑談ほど日常的でもない。適度な緊張感を持ちながら第三者に届く言葉で語る「セミフォーマルな場」として機能し、収録外の意見交換も含めて、研究的な議論を活性化させる契機となった。

第三に、キーワードマップが媒介した社会的対話である。マップを提示した公開講座では、来場者から率直な疑問や意見が寄せられ、出演者との応答を通じて議論が深まった。こうしたフィードバックは、マップによって全体像が共有されたからこそ生まれたものであり、従来のキーワードでは捉えきれなかった生活感覚や新たな着眼点を浮かび上がらせた。これは、マップによって議論を俯瞰しながら共有できたからこそ生まれた成果である。マップは知見を整理するにとどまらず、社会との相互作用を触発し、研究を拡張する媒介装置として機能した。

以上のことから、近江学ラジオとキーワードマップは、「惣・座・講」研究プロジェクトを現代的に実践し、社会に開く新しい成果発信のモデルであることが確認された。今後は、公開講座で得られた視

点をもとに、ラジオ制作を継続しつつゲストやテーマを拡充することで、より多様な「物・座・講」の実践を記録・可視化していくことが課題である。本研究ノートがその一歩を示すものとなれば幸いである。

参考文献

- 「近江学MUSUBU座―現代の生業のコミュニティ」石川亮
『近江学』第十六号 七十六―八十九頁 成安造形大学附属
近江学研究所 二〇二五年
- 文化誌『近江学 物―はじまりのコミュニティ』第十五号 成
安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二四
年
- 文化誌『近江学 講―つながりのコミュニティ』第十七号 成
安造形大学附属近江学研究所編 サンライズ出版 二〇二六
年
- 近江学研究所「キャンパスが美術館開館十五周年記念展覧会
近江学MUSUBU座『火水木から考える』展覧会情報、
成安造形大学（二〇二五年）([https://artcenter.seian.ac.jp/
exhibition/7987/](https://artcenter.seian.ac.jp/exhibition/7987/)) 二〇二六年一月九日閲覧

成安造形大学附属近江学研究所
紀要 第15号

発行日 令和8年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学

附属近江学研究所

T 520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 加藤賢治

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社